
フェニックス

愁助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェニックス

【Nコード】

N9616G

【作者名】

愁助

【あらすじ】

少年達で構成された「フェニックス探偵団」は、住民の悩み事や困りごとを解決すべく日夜活動している。ある日、街の人々を悩ませるラクガキの常習犯を捕まえるため、張り込みをすることに。

生い茂る草木。

若干光が射し込む薄暗い雑木林。

道から離れた場所に子供達が作った秘密基地が存在する。

木々の上に板で床を造り、藁などで屋根を製作。見た目は悪いが、意外と頑丈な造りになっている。建物の中には子供達が持参してきた机、椅子、遊び道具などが置かれている。

そんな秘密基地に今日も子供達が集まっていた。

「よっしゃ、今日も我らフェニックス探偵団は町の悪どい輩を叩きのめす！ ついでにパン屋でパンをせびるのだ！」

若干茶髪の天然パーマ、歳は13、4くらいの少年、李・寛呂が握り拳を挙げる。

「おーっ！」

周りに居た少年少女達も笑顔で握り拳を挙げた。

「……ふっ」

すました笑みでそんな彼らを見守るのは黒髪の少年。顔立ちは整っており、歳は寛呂と同じくらいであろう。名前は古・刹那。

大人びた雰囲気からこのフェニックス探偵団のリーダー的存在である。

「刹那、早速悪どい輩、汝・無雨を懲らしめる作戦を教えてください」
寛呂が刹那に尋ねる。

「ああ、奴らは今日も瀬邸の壁に落書きをするはずだ。瀬さんから正式に我らフェニックス探偵団に依頼が来たから、魔法石の使用許可を得、数個頂いた。だから、今回は魔法を使用した作戦を考えてきた」

刹那がそう言うと、

「やつほーい！ 今日魔法使えるってよ！」

10歳くらいのやんちゃそうな少年 杖・擬音がそう小躍りし

出す。

「学校でしか使えなかったけど、やっと外でも使えるのね！」

綺麗で長い黒髪を持つ少女　琉・衣類が感嘆の声を挙げる。

「わぁー、リーもつかえるのー？」

衣類の妹の琉・李衣もキャツキャツと喜ぶ。

「兄さん、魔法だつて！」

寛呂の肩を揺するのは、6、7歳くらいの少年　寛呂の弟、李・

賢呂は嬉しそうに言う。

「そうだな。賢呂、使い慣れない魔法でへマすんなよ」

「もう、兄さんは僕を子供扱いしてー。僕も今年で8だよ？」

不服そうに賢呂は寛呂の服の裾を掴む。

「そうだったな。賢呂ももう8だったな。よちよち」

寛呂は子供もあやすように賢呂の頭を撫でる。

「だ・か・らー！　子供扱いしないで！」

ムキになる賢呂はどう見ても子供だった。

夜中。

刹那は瀬邸の門の茂みに身を潜めていた。

「衣類、そっちに対象は居たか？」

刹那はポケットから石のような物を取り出すと、それに呼び掛ける。
る。

「居ません！　異常無し！」

「いじおーなし！」

石からそんな衣類と李衣の声が聞こえてきた。

「寛呂、そっちはどうだ？」

「居ないぜ。賢呂、そっちに異常ないか？」

「無いよ、兄さん」

刹那の問いに寛呂と賢呂からの返答。

「擬音、そっちは？」

「こつちも異常無しだ。リーダー……つて、居た！　リーダー奴らだ！」

焦ったような擬音の小声が石から聞こえる。

「裏門か……擬音、奴らに気付かれてないな？」

「はい、リーダー！」

「よし、擬音はそのまま待機。奴らの行動を監視するんだ。もし、気付かれたら、即逃げろ。良いな？」

「アイアイサー！」

石から擬音の小声だが、元気のある返事が聞こえてきた。

「寛呂、賢呂、お前らは裏門へ回れ。その際にもう一つ配布した魔法石の使用を許可する。だが、気を付ける。我々が持つ魔法石では攻撃魔法は一回しか使用出来ない。失敗は許されない」

「了解。任せとけて」

「うん、判ったよ刹那兄さん」

石から寛呂、賢呂の真剣な声が返ってきた。

「私達は何をすれば？」

「なにをすれば？」

次に衣類と李衣の音が聞こえてくる。

「お前達は寛呂達の反対側から裏門へ回れ。奴らを追い詰めるんだ。だが、予備の3つの魔法石はお前達は使うな。奴らがお前達に攻撃を仕掛けてきた時に防御魔法を行使しろ。3つあれば《ヘル》が使える。魔力ギリギリだが。衣類、お前なら出来るはずだ。くれぐれも攻撃魔法に使用するなよ」

「了解」

「りおーかい」

彼女らの返事が聞こえたのを最後に石からは声がしなくなった。

寛呂と賢呂は裏門へ走る。

「賢呂！　必ず俺の後ろに居ろ！　ヤバかったら、逃げろ！　良い

な!？」

「うん、判った! 兄さん!」

素直に頷く賢呂。

賢呂は理解していた。もし、寛呂が攻撃魔法に失敗すれば、必ずこちらに攻撃が来る事を。故に、兄が自分の身をあんじてそう言っているのだと。

「居た! 兄さん、奴らだ!」

寛呂と賢呂の先、裏門の近くにこそと動く人影が三つあった。「敵は三人……賢呂、まだ気付かれていない。今がチャンスだ。俺は攻撃魔法を行使するが……失敗した時はすぐ逃げる」

「了解。兄さん。でも、兄さんなら成功させるって信じてるよ」

「サンキュー」

寛呂はそう礼を言った後、ポケットから石 予備の魔法石を取り出し、手に持つと、

「《リオ・フレア・プレス》」

呪文を唱える。

魔法石から 実際は握り拳から三つの小さな炎の刃が人影を襲う。

「あっちゃー! なんだっ! くっそー! 魔法だ! バレてやる!」

人影 ひとりの青年がそう叫ぶ。

「あっちゃあーちゃっ! あ、頭に火がっ! 火がああああっ!」
もうひとりの青年は頭が燃えていて、それを必死になって消そうとしている。

「く……アホが。避けるよ。《リオ・アクア・シャワー》。無駄に魔法石使っちゃった……糞。ちっ……どこのどいつか知らねえがやってくる」

憎々しげにそう呟く人影。その人影の魔法のお陰で頭の火が消えた青年はびしょ濡れになり、頭が少し禿げてしまっていた。

寛呂は賢呂に来るなと合図すると、

「ふはははっ、我らフェニックス探偵団。悪事を働く不屈き者よ。我が魔法で成敗してくれる！」

寛呂は青年達の前に出ると、傲慢な態度でそう高らかに言う。

賢呂は焦っていた。魔法石はさっきので使ってしまったので、魔法はもう使えないからだ。

「兄さん……」

心配そうに賢呂は寛呂を見つめる。

「くっ……、お前ら逃げるぞ。また魔法石を使わされちゃ堪らないからな」

「おうっ！」

「髪いー！俺の髪返せー！」

魔法を使った奴がそう指示を出すと、残りふたりは指示に従い、寛呂とは反対側へと走り出す。

衣類と李衣は刹那の指示通り、寛呂達とは反対側から回り込んでいた。

「李衣、お姉ちゃんの背後にちゃんと隠れておくのよ」

「はい」

走りながら、元気良く返事する李衣。

「もし、お姉ちゃんがやられそうになったら、一目散に逃げるのよ」

「……やあ」

衣類の言い付けに先程の反応とは違い、悲しそうに拒絶する。

「やあじゃない。はい、でしょ？」

「やあ！おねえちゃん、おいてくの、やあ！」

李衣は立ち止まり、そう泣きそうな表情になる。

「もう……李衣。……でも、これだけはお願い。逃げて」

衣類は優しく諭すが、

「……やあ」

断固として拒否。

「李衣……お願い。……じゃあ、刹那を呼んできて。お姉ちゃんがやられそうになったら、刹那を呼んで。それで良い？」

「それでおねえちゃんたすかる？」

「うん、助かるから、ね？」

「……わかった」

渋々といった感じに頷く李衣。

衣類は安堵した表情になり、それから真剣な表情で前を見つめる。

「……李衣は私が守る」

青年達は衣類達が待ち受ける場所へと向かっていた。

「糞っ！ フェニックス探偵団め……クソガキの集まりが調子に乗りやがって！ よくも俺の、俺の、頭を！ 髪を！」

禿げた青年は走りながら悲しそうに頭をさする。

「馬鹿が。あんな安定してない魔法を避けられないお前が悪い」

魔法を使った青年 汝・無雨が呆れたように言う。

「だって！ 不意打ちじゃねえか！ 魔法石があったら！ あんなクソガキ！」

禿は憎々しげに顔を歪めた。

「おい、江渡。お前、魔法石持ってたよな？」

もうひとりの青年に汝は尋ねる。

「ひとつだけな」

「たく……用意周到じゃねえな。俺達」

溜息をつく禿。

「仕方がないだろう。一応、魔法石は大人にならなきゃ持ち出せないし。持ってたら、警察に捕まるし。まあ、大人になれば、そんな石ツコの魔法石ではなく、宝石を使用すると思うが」

汝がそう禿を宥めるような口調で言った。

「どうでも良いけど、あいつらなんで魔法石持ってんだよ。クソガキのなのに」

禿が不服そうに呟く。

「たぶん、瀬の奴が配布したんだろ。僕ら対策用に」
禿の問いに江渡が答える。

「だろうな。瀬め……いつか殺してやる。我が一族の敵」
汝が憎悪に顔を歪めた。

「無雨……僕達は力を貸す。あんな腐れ野郎の瀬なんて、ぶっ潰してやる」

「おうっ！ その為に魔法の勉強しまくらなきゃな！ ブローケンベルトも力になってくれるって言うし」

ふたりは汝を励ますようにそう言った。

汝はふたりを少し見つめ、腕で目尻を拭くと、

「ブローケンベルト……我が一族の忠義の集まり。ふっ……見てろ。瀬。お前達に地獄を見せてやる。我が一族の苦痛……倍返しにしてやる」

そう不敵に笑うのだった。

衣類は足音を感じとった。前方から聞こえる。奴らが来る。

「李衣、私から離れちゃダメよ？」

「うんっ」

衣類にしがみつくと李衣。

「……よし。私なら出来る。刹那の言う通りにすれば大丈夫。作戦通りなら刹那ももうすぐ来るはず……それまで私は足止め。私の演技にかかっている」

衣類は深呼吸する。そして、表情を変えた。

汝達は前方にひとりの少女と幼い女の子が居る事に気付く。

「……女？」

「まさか、またフェニックス探偵団じゃないだろうな」

「……そのまさかだろ。大体、こんな時間にあんな幼稚園児連れてガキなんざ居ないだろ、普通」

汝は状況判断しようとして衣類達を観察する。一見、普通女の子達。魔法石を使う素振りも無い。

少女達はゆっくりとこちらに近付いてくる。

汝達は構える。先程の事もあつた為、警戒態勢に入ったのだ。

「ねえ、お兄さん達……なんで瀬さんの家に落書きしたりするの？」
「するのー？」

少女達がそう問い掛けてきた。

ただ普通に問い掛けてきているだけだ。しかし、汝は警戒心を緩めない。

なにか裏があるはずだ。

「やめて欲しいなあー？」

「ほちいなあー？」

汝は先程江渡から預かった魔法石に手を掛け、魔法を使うか迷う。少女達はただ喋っているだけ。なのに、汝達は先に進めなかった。別に道を遮られているわけでもないのに。

汝はやバいと判断。このままでは後方に居た奴が追い掛けてくるはずだ。そうなると、挟み撃ち。

「悪いが、お嬢さん方の言うことは聞けない。俺は君たちに危害を加えたくない。だから、そこをどいて欲しい」

「無理だと言ったら？」

「いつたら？」

少女達の表情は変わらない。汝はやはり敵は魔法を使ってくる判断。

（ならば、先手必勝！）

「無理にでもどいて貰う！ 《リオ・ウィン・ブレス》！」

汝は先程江渡から預かっていた魔法石をポケットから取り出し、そう叫ぶ。

汝の手から風の刃が少女達を襲う。

(手加減はしている……精々吹っ飛ぶ程度)

汝は少女達が吹っ飛ぶのを予測し、走ろうとしたが。

「《ヘル・シャイン・シルド》」

風の刃が少女達を襲う直前、少女 衣類がそう呪文を唱え、透明な半円球のシールドを作り、自らを護る。

風の刃は少女達に届かずシールドに当たり消えた。

「ば、馬鹿な……中級魔法の盾だと!」

汝は驚愕する。

(あり得ない。こんな少女が……中級魔法 しかも、中級の中魔法を。あんな複雑な魔法図を、覚えたと言うのか……この歳で。それよりも……こんな魔法を使うのだから、確実に宝石を持っている。ヤバい……魔法石はもう無い。このままでは確実に俺達は……)

汝は少女を睨み付け、警戒したように後じさる。

少女は握っていた魔法石三個を捨てる。今や、魔力の失われたただの石ツコロだ。

(……っ!?)

汝はまたもや驚愕する。

(石……だと!? 宝石じゃないのか……石で、石なんかで中級魔法中を作りあげたと言うのか……! 何者だ……この娘)

「そこまでだ!」

少女達の背後の闇からそんな声が聞こえた。

「刹那っ!」

「せつなっ!」

少女達は待つてましたというように嬉しそうな声をあげる。

「く……」

汝は下唇を噛み締める。江渡と禿も冷や汗を掻く。

「衣類、李衣、よくやった。下がれ。正門へ行け。寛呂達も居るはずだ。ここは俺に任せろ」

「はい!」

「はい！」

闇の指示に従い、少女達は闇の方へ走っていく。少女達の気配が無くなり、闇からこちらへ近づく足音が聞こえてくる。

「俺達を捕まえるつもりか……？」

冷や汗を垂らしながら、汝は闇に話し掛ける。

「いえ、私はそんなつもりは一切ありません」

闇の冷静な声が返ってくる。

「嘘をつけっ！ この瀬に雇われたフェニックスのクソコイ又どもが！」

禿がそう憎々しそうに叫ぶ。

「確かにフェニックス探偵団は瀬に雇われました。しかし、私は瀬の狗になっただけではありません。何故なら」

闇から徐々に姿を現す。

「私は貴殿方の狗だからです」

そこには古・刹那が立っていた。

不敵な笑みを浮かべて。

「お前は……？」

「私は古・刹那。貴方に忠義を誓う者です」

汝がそう尋ねると、刹那は名乗った。

「じゃあ、お前が……あのブロークンベルトの古一族なのか？」

汝は警戒しつつも、尋ねる。

「はい、無雨様」

恭しく頭を下げる刹那。

「何故、古の子がフェニックス探偵団なんかを……」

「情報収集の為にございます。子供なら手に入れにくい情報も手に入ることもあるので」

江渡の問いに刹那が答える。

「あの少女……中級魔法を使用していたが、彼女もブロークンベルトの仲間なのか？」

汝が疑問をぶつける。

「いえ、フェニックス探偵団の団員は皆ブロークンベルトとは関係ありません。情報収集の為、私が勝手に結成した組織です。“例の作戦”の時には排除します」

「は、排除って……こ、殺すって事かよ!？」

禿が恐る恐る訊く。

「はい」

刹那は躊躇なく答えた。

「な、仲間じゃねえのか？」

「違います。彼らは我らブロークンベルトの情報収集に利用したに過ぎません。利用価値が無くなれば、棄てるだけです」

禿は戦慄する。こんな自分より年下の少年がこんな残酷な事を躊躇いもなく言う事に。

「れ、例の作戦って？」

江渡が尋ねる。

「江渡様……貴殿方には申し上げられません。貴殿方にはまだ酷過ぎます。貴殿方は上部の言うことを聞き、避難してください」

「こ、酷って、お前の方が俺達より年下だろ？」

「潮流様、確かに私は貴殿方より幼いです。しかし、私は闇を知る者でございます」

禿の問いに刹那は淡々と答える。

「……」

三人は絶句する。

「明後日の正子、作戦は決行されます。それまでに貴殿方には避難して貰います。明日の午前七時、町の正門に来てください。迎えが待っております。では、彼らが待っておりますので、失礼します」

刹那はそう言うと、闇へと去っていく。

三人はただ立ち尽くすだけだった。

雑木林の中にある秘密基地。

茶髪の天然パーマの少年、寛呂は小躍りしていた。

「賢呂見てみる！ 魔法石がこんなに！」

寛呂は小石が敷き詰められている木箱を指差しながら、薄い茶髪でパーマとはいかない癖つ毛の髪の少年、賢呂に笑い掛ける。

「兄さん、落ち着いて。判った。判ったてば」

兄のはしゃぎっぷりに苦笑しながらも、賢呂は兄を宥める。

「全くどつちが兄なんだか判んないわね」

そんな兄弟のやり取りを呆れた様子で眺めるのは綺麗な黒髪を持つ少女、衣類。

「わかんないわねー」

きゅきゅきゅと衣類の言葉を真似するのは今年で4歳になる衣類の妹、李衣。

「リーダー！ 魔法石こんなにあんだから、俺にも魔法やらしてくれー！ 前回の時、魔法石使わしてくんなかったんだからさー！」

活発そうな少年、擬音がそうふて腐れたように文句を言った。

「そうだな。今回の仕事のお陰で、瀬さんから大量に魔法石を頂いた。まあ、一個辺り、魔力は《リオ》一回分と半分程度ぐらいだろうが……魔法を使えるというのは我々フェニックス探偵団の助けとなるだろう」

擬音に文句を言われたのはサラサラの黒髪に整った容姿、大人びた雰囲気漂わず少年、刹那。

刹那は木箱から魔法石をひとつ取り出すと、それを弄ぶ。

「だろ、だろー？ ならば、俺も魔法ー！」

擬音は眼を輝かせる。

「ダメだ」

しかし、刹那はそれをきっぱり拒否した。

「な……なんでだよー！ リーダー！」

擬音は不満そうに文句を言う。

そんな擬音に刹那は溜息をつき、そして、

「擬音、お前は魔法をなめてる」

睨んだ。

鋭い眼光。

擬音はビクツと怯える。

刹那は構わず続ける。

「ここにいる魔法を扱えるのは俺、寛呂、衣類だけだ。擬音、何故だと思っ？」

刹那はそう問い、擬音は思案する。そして、おずおずと、

「中等部……だから？」

「ああ、正解。擬音、その通りだ。魔法は中等部から本格的に習う。しかしだ。中等部でも習うのは初級魔法のみ。《リオ》と《セル》だけだ。擬音、何故だと思っ？」

またしても刹那の問いに擬音は頭を悩ませる。うーんと唸ってから、

「えーと……魔法が難しいから？ 中等部じゃあ、初級魔法を覚えるだけで精一杯だから……？」

「違う。擬音、間違っている。中等部でも才能がある奴は中級魔法をマスターしている奴もいる。現にここに居るしな」

刹那は衣類を一瞥する。衣類は照れたように頬を染め頭を掻く。

「じゃ、じゃあ、なんなんだよ」

擬音は少し拗ねたように刹那を睨む。

「魔法が殺人凶器になるからだよ」

刹那の冷たい声。

一瞬、この場に居た者全員が凍りついた。

「擬音、覚えておけ。魔法は便利だ。今の世の中、魔法あってこそこの世界だ。魔法は素晴らしい。だが、魔法は……時に人を傷付ける道具となる。人を死に追いやることもある。魔法は人を幸せにするでも、使い方を間違えれば、人を簡単不幸に出来る」

刹那は擬音の瞳を見つめ、擬音はそれにビクツとなる。

「擬音、お前にはまだ魔法は早すぎる。安定していない魔法程危な

いものはない。一步間違えれば……。俺もお前に意地悪をしたいわけじゃないんだ。擬音、判ってくれ」

刹那の静かで、それでいて、必死な説得に、

「……判ったよ。リーダー」

頷く擬音。

「ありがとう。擬音」

刹那は擬音の頭を撫でる。擬音は少し拗ねた顔をしつつも、抵抗はしなかった。

「あー！ リーも、リーも！」

刹那に撫で貰っている擬音を見て、李衣が騒ぎ出した。

先程のしんみりとした雰囲気は一気に吹っ飛んだ。

「あつ！ そうだ！ 今日、お母さんにお使い頼まれてたんだった」
唐突にそう叫んだのは衣類。

「ごめんけど、私達帰るね？」

衣類はすまなさそうな顔をしながら、刹那達にそう言った。

「ああ、気にすんな。早くしないと店が閉まるぞ」

そう笑顔で応えたのは賢呂。

「うん、じゃあ、行くよ、李衣」

衣類はそう李衣を手招きするが、

「やあー。リーまだかえりたくない」

不満そうに頬をふくらまして、李衣は賢呂に抱きつく。

賢呂は苦笑する。

「李衣、わがまま言わないの」

怒る衣類。しかし、李衣はふいっとそっぽを向く。

「李衣！」

「姉さん、抑えて」

李衣のそんな態度に怒鳴った衣類を賢呂は宥める。

「李衣は頑固だし、このまま言い争ってたら時間無くなってお店閉まるよ。姉さん、李衣は僕に任せて。ちゃんと責任を持って送って帰るから」

「でも……」

申し訳ないと渋る衣類を見て、

「いいじゃないか。衣類、李衣は李衣の未来の旦那様に任してニヤリと笑いながら刹那が口を挟む。

「なっ！ 刹那兄さん、李衣と僕はそんなんじゃ……！」

顔を真っ赤にして反論する賢呂。

「顔が真っ赤だぞ、未来の旦那様」

刹那に便乗してからかう寛呂。

「に、にいさぁーん！」

賢呂はニヤニヤ笑う兄に叫ぶ。

「ちっ……李衣狙ってたのになぁ……まあ、未来の旦那にや勝てねえわ」

悔しそうな顔をして、ニヤリと笑う擬音。

「擬音、嘘をつくなっ」

賢呂は擬音を睨む。

「りー、けんりよのおよめさん、わーい」

よく理解していないであろう李衣はきゅきゅと言ぶ。

「……李衣、意味解ってないでしょ」

賢呂は自分にしがみつく無垢な少女を諦めた表情で見る。

「しょうがないわね。未来の旦那様に任せましょ」

衣類は仕方ないと溜息をつき、小さくニヤリと微笑む。

「ね、姉さんまで……」

賢呂は情けない声を出す。ふと、賢呂が李衣に視線を移す。李衣は瞳をうるうるさせながら賢呂をじっと見つめ、

「あなた、ごはんにしますー？ お風呂にしますー？ それとも、わ・た・し？」

李衣は精一杯の色っぽい声出し、そう言う。

「李衣！ お前、実は解ってやってるだろぉー！」

賢呂が顔を真っ赤して怒ったのは言うまでもない。

町外れのコンクリートで造られた四階建て、長方形の形をした建物があった。

所々、欠けており、長い年月が経った事が見受けられる。

二階の一室。月光が硝子の存在しない窓から差し込み、部屋を照らす。

そんな月明かりに照らされ、恭しくも片膝を床に付け、頭を垂れているのは黒髪の少年 古・刹那。

「無雨様は避難なされたか？ 刹那よ」

月光が差し込まない部屋の影から低い声が部屋に響いた。

「はい、父上。無雨様、江渡様、潮流様は今日の午前、無事避難されました」

刹那は淡々とそう答えた。

「そうか。なら、良い。……刹那よ。今宵、作戦が実行される。……お前はここで生まれ育った。フェニックス探偵団もある。この作戦はお前には……あまりに酷だ。無理は言わん。もし、お前がやめたいのであれば、無雨様の護衛へと回れ。代わりはいくらでもいるのだから」

闇から哀れみの交じった声がそう告げた。

「……」

刹那は沈黙し、眼を閉じる。

脳裏に寛呂達の顔が浮かび、刹那は顔を歪ませ、下唇を噛み締めた。

そして、意を決したように眼を見開くと、

「いえ、やります！ 私が……いや、私でなければ……」

刹那は目線を地面に落とし、

「……あいつらは私でなければ」

そう小さく呟く。

そして、目尻から頬へと水滴が零れ落ちた。

暗闇を制す夜。

静まり返った住宅街を疾走する二つの人影があった。

「早くしろ、賢呂」

「はあはあ……ま、待ってよ。……兄さん速いって……はあはあ……
……兄さんみたいに……僕……速く走れないっ」

賢呂は息を切らしながら、兄に追い付こうと走るが、若干ペースが遅い。

賢呂の前で足踏みをしながら兄の寛呂は、若干呆れたような顔で弟が追い付くのを待っている。

「たく……たかがちよつと速いスピードで走ったくらいで……こんなんじゃ、フェニックス探偵団の名が泣くぜ」

「う、うるさいなあ……はあはあはあ」

やっと追い付いた賢呂はその場で息を整える。

「それにしても、刹那兄さん、こんな時間に何の用なんだろう……」
賢呂はポケットから魔法石を取り出し、それを見つめる。

「さあな、なんかすっげー重要って言ってたし、フェニックス探偵団関係じゃないか？」

「こんな時間に？」

寛呂の発言に賢呂は怪訝そうな表情で寛呂の顔を見る。

「よっぼど重要なんだろ。行けば解る。刹那のする事だ。間違えなんてねえよ」

「そうだね」

寛呂は自信満々にそう信頼仕切った表情で言い、賢呂も同意した。

同時刻

寛呂達とは反対側の住宅街を2つの人影が走っていた。

「全く……刹那の奴。なんなの。こんな時間に呼び出して」
不満そうに呟いたのは長い綺麗な黒髪を持つ少女、衣類。

「ま、リーダーなりになんかあるんじゃない？ フェニックス探偵団の事とか」

衣類の愚痴に応えたのは10歳くらいの少年、擬音。

「……うーん……」

眠たそうな可愛らしい声をあげたのは衣類の妹、李衣。

李衣は擬音に背負われている。走っている所為か若干寝苦しそうだ。

「でも、時間を考えて欲しい。李衣まで連れて来いなんて……」

未だ不服そうに衣類は前方を睨み付け、そして、李衣を背負っている擬音の方に顔を向け、寝苦しそうな李衣を心配そうに見つめる。

「はは……まあ、確かにそれは思うな。母ちゃんにバレないように外に出るのは結構神経使ったし」

擬音はなるべく身体が揺れないよう意識しながら、そう苦笑する。

「本当よ……」

衣類は鼻を鳴らし、ふと、突然立ち止まる。

「……なに？ どうかした？」

急に立ち止まった衣類に擬音も立ち止まる。

「……なんか視線を感じる」

衣類は眼を細め、警戒したように辺りを見渡す。

しかし、辺りは何も変わった様子もなく、静寂が制している。

「視線？ こんな時間に？」

そんな馬鹿なと言いたげな表情をする擬音。

一応、辺りを見渡すが、何も異変は感じられない。

「……うん、確かに感じた」

しかし、衣類は警戒心を解いた様子もなく、進行方向とは逆の後方を睨んでいた。

「……嫌な予感がする。擬音、急ご。早く刹那と合流しなきゃ」

いつになく真剣な衣類に擬音は息を呑み、頷いた。

古・刹那は秘密基地を見つめていた。
なにをするでなく、ただ見つめていた。

「……………」
暫くして、右手に持っていた魔法石が一瞬熱くなるのを感じ、刹那はそれを耳元に持ってくる。

「作戦開始」

石から低い父親の声が聞こえた。

刹那は魔法石をポケットにしまい、そして、キラキラと煌めく石
宝石を取り出した。

黒いローブを纏い、深くフードを被った数人の人影が住宅に向かつて、魔法を唱える。

「《バルトニス・ウイン・トルネード》」

竜巻が起こり、住宅に向かつて突撃する。

住宅は一瞬にしてバキバキと音を発てながら、破壊された。

「《バルトニス・フレア・ファイア》」

赤い光が建物にぶつかつた瞬間、炎が燃え上がり、一瞬にして、
建物すべてを炎が覆い尽くした。

「……………なっ！ どうなってるんだ！ つつ、おま、お前ら何をやってるんだ！」

異変に気が付いた住人が路地に出てきた。そして、黒いローブの
集団に気付き、そう叫ぶ。

黒ローブの集団が住人に振り返り、

「《ヘル・サンダー・ピアス》」

ひとりがそう住人に向かつて呪文を唱えた。

その瞬間、黒ローブの袖口から青い閃光が飛び出し、狙ったように
住人の胸を貫く。

「つつ……………」

住人は事切れ、その場に倒れた。

寛呂と賢呂が雑木林のすぐ傍に着いた頃だった。

「……っ！」

寛呂は町の異変に気付き、住宅街の方を見つめる。

「はぁ、はぁ……どうしたの？ きゅ、急に……立ち止まって」「
乱れた呼吸を整えながら、賢呂はそう尋ねた。

「……煙が」

そう寛呂は呟き、住宅街を見つめていた。

「煙？」

賢呂は怪訝そうな表情で寛呂の視線を追う。

「……本当だ」

賢呂は住宅街からモクモクと上空へとあがる煙を見て、啞然としたように呟いた。

「火事かな？」

そう衣類が尋ねるように言った。

「……たぶん」

答えたのは擬音。

雑木林に近い住宅街の端っこに衣類達は居た。

「うわぁ……もえてる」

そう呟いたのは擬音の背中にいる李衣。

住宅街の真ん中辺りが橙色に輝き、もくもくと灰色の煙を吐き出していた。

「兄さん、どうする？ ヤバイよ！ あっちってウチがある方だし

！」

賢呂は焦ったようにそう寛呂の顔を見る。

「……っ」

寛呂は顔をしかめ、煙のあがる住宅街を睨むと、

「仕方ない！ 刹那に連絡をとるぞ！ 刹那なら、必ずなんとかしてくれる！」

寛呂はズボンのポケットから魔法石を取り出すと、口元に持っていき、

「刹那！ 応答しろ！ 刹那！」

そう石に向かって叫ぶが、

「……」

何の応答もない。

「糞っ！ 刹那の奴、なにやってんだよ！」

寛呂はそう悪態をつき、魔法石を睨んだ。

「仕方ない…… 衣類達と先に連絡をとるか」

寛呂はそう呟くと、また魔法石を口元に持っていき、

「衣類！ 応答せよ！ 衣類！」

「……聞こえてるよ！ 寛呂」

衣類の声が返ってきた。

「衣類、お前達も気付いていると思うが……」

「判ってる。住宅街の真ん中辺り、大火事よ！」

衣類は寛呂の声を遮るように言うと、住宅街の真ん中で燃え上がっている炎を睨む。

「マジヤベーよ！ 本格的に火が移ってる」

「おかあさんは！ おとうさんも！」

衣類の隣でそう叫ぶ擬音と季衣。

「さっき、刹那に連絡を取ろうとしたが、繋がらない！」

寛呂がそう言うつと、

「私も全然繋がらない！」

石からそんな衣類の焦った声が聞こえてきた。

「くっそー、あの野郎、なにやってんだか！ 石を手放してて気付きませんでしたなんて事だったら、ぶっ殺してやる！ 仕方ない。

衣類、今お前達が居る場所は！？」

寛呂が悪態をついた後、そう尋ねると、

「もうすぐ、町の外に出る！」

石からそんな衣類の答えを聞くと、寛呂はニヤリと笑った。

「そうか。ナイスタイミングだ！ 俺達はもう外に居る。基地の近くだ。衣類、まずは合流しよう。それから、基地に行く！ もしかしたら、あのバカが基地でのんびり寝てる可能性があるからな！ あのバカさえ、合流すりゃ、こんな火事くらいなんとかなる！ 世界だって制覇できるぜ！」

不敵な寛呂の声が石から聞こえ、

「やっぱ、寛呂は刹那が居ると頼りになるよ」

衣類はそうくすりと笑う。

「なんだとー！ 俺はあいつなんて居なくても頼りになるっつーの！」

石から寛呂のムキになる声が聞こえ、衣類はまったくくすりと笑った。

そして、衣類は燃え上がる住宅街を見つめ、ある違和感を感じた。

(どうして、誰も起きてこないの……？)

こんな大火灾になりながら、辺りは静かだ。野次馬すら居ない。

「……」

衣類は眼を細め、真剣な顔つきで、街を眺める。

「衣類！ なにしてんだ！ 寛呂と合流すんだろ！」

少し先に進んでいた擬音は季衣と手を繋ぎ、そう衣類に呼び掛けた。

「あ、うん。ごめん」

「そう衣類は謝り、擬音のもとへ走るが、もう一度振り返り、
「……」
不穏な何かを睨んだ。

衣類達を待つ間、寛呂は考え事をするように片足だけ足踏みをし、
賢呂は燃えている住宅街を見つめていた。

「兄さん」

「ん？」

ふと、考え事をしていた寛呂は顔を上げ、ぼーっと住宅街を見つ
めていた賢呂を見る。

「何かおかしいよ」

「おかしい……？ なにが？」

「……絶対、おかしい」

そうひとり呟き、何かを確信した賢呂。

「だから、何かおかしいんだ」

よく判らない寛呂は怪訝そうな表情をし、尋ねた。

「兄さん、判らない？ こんな大火事なのに、なんか街が静か過ぎ
るよ。……普通もう火事に気付いて、街のみんな避難しようとして
るはずだよ」

寛呂は、はっとなり、住宅街を食い入るように見る。

「何より変なのが……魔法消防団が来てない事」

そう賢呂が言い、

「……確かに」

寛呂はそう小さく呟き、冷や汗を垂らした。

衣類達は街の外の雑木林を目指して走っていた。

「あ、門だ！」

街の外へと繋がる正門が見えた。

彼らの秘密基地は正門を抜けた雑木林付近に存在する。

「よし、後もう少しよ！ 李衣、大丈夫！？」

衣類は正門との距離を確認し、隣を走る少し息の荒い李衣を心配そうに見る。

「う、うん……だいじょうぶだよ……はあはあ……りーつよいこだもん！」

李衣はそう無理矢理笑顔を作ってみせる。

「……うん、李衣強い子だもんね。後もう少しだから頑張ろう！」
衣類は元々繋いでいた李衣の手をもっと強く握り締めた。

「よし、門を抜ければみんなが　っ！？」

擬音がそう正門を走って抜けようとした時だった。

壁に衝突したかのようにゴンツと“門の間”にぶつかり、後ろに尻餅をついた。

「痛つてえ……なんだ！？」

擬音は先程ぶつかった“門の間”を凝視する。

「どうしたの！？」

後ろに居た衣類はいきなり尻餅を着いた擬音に驚きながら、尋ねた。

「知らない！　なんか壁みたいのがある！」

擬音もわけが判らないというように門の間を指差す。

「壁？？」

衣類は怪訝そう顔になりながら、手を前に突き出し確認しようとする。

「っ！？」

丁度、門の柱の間に突入しようとした指先が何やら物体にあたる。

「あるだろ？」

隣で尻餅をついていた擬音が衣類にそう同意を求めた。

コクリと頷いた衣類は手の平で確認する。まるで透明な壁が存在するかのように堅い何かがある。

「壁……いや」

そう衣類は見えない壁を触りながら眩く。

衣類は何を思ったか、壁を触りながら、右に行く。

「衣類？ どこに……」

擬音は衣類の行動を見ながら、漸く立ち上がる。

一方、衣類は擬音を無視して門の柱を通り越し、空を手探りで触っている。

「……やっぱり」

衣類は手探りをやめると小さくそう呟いた。

「何がやっぱりなんだ？」

衣類に近づくと擬音と季衣。

「あ、うん。……ここ一帯に結界が張ってある」

「結界!?!」

擬音が驚愕する。

「うん。たぶんだけど……この結界、この町を覆ってると思う」

「町を覆ってるって……まさか」

嫌な予感がするという表情の擬音。

しかし、衣類は躊躇するなく告げた。

「うん、閉じ込められた」

「閉じ込められた!?!」

大声をあげたのは寛呂。

「うん、たぶんだけど……町一帯に結界が張ってある」

そう石から冷静な口調の衣類の声が聞こえる。目の前には冷静な表情の衣類が居る。

二人は結界を挟んで魔法石で会話をしていた。

「……ど、どうすんだよ!」

寛呂は結界に触れながら、困惑気味の表情で怒鳴る。

「寛呂、冷静になって。今は私と寛呂でなんとかしなきゃ」

衣類の諭しに頭が冷えたのか、寛呂は深呼吸する。

「……すまん。そうだな。でも、衣類、間違ってるぜ。俺とお前だけじゃねえ、こいつらも居るだろ」

ニヤリと笑う寛呂は隣に居た賢呂の頭をぐりぐりと撫で、対面している擬音と李衣を見据える。

「そだね」

衣類はくすりと微笑む。

「極めつけはあのバカ野郎だ」

先程の狼狽ぶりはどこへやらというように、寛呂は不敵に笑った。

「うん、刹那が居れば、私達は最強だね」

「おうっ！」

衣類に寛呂は同意し、

「よっしゃ！ エンジン入ってきたあ！ 衣類、やるぜ！ フェニ

ックス探偵団、ここに見参！」

「くすくす、やっぱ、寛呂は刹那を出すと頼りになる」

衣類はくすくすと笑う。

「ちが、だからあー！ ……って、んな場合じゃねえ！ 衣類、お前も大体判ってると思うが」

「うん、私は街のみんなと接触をとってみる。たぶん、みんなが起きてこないのは、何かしら魔法を掛けられている所為だと思うし」

衣類は強い意志の宿った瞳で寛呂を見る。

「ひゅ〜、流石、神童と呼ばれるだけあるぜ。ま、そこまで判ってんなら良いか。衣類、俺は刹那と合流する。もし基地に居ない場合は……」

寛呂は表情を曇らせる。

「大丈夫だよ。刹那は生きてる。絶対、基地に居るはずだから」

衣類は優しくそう元気付けるように言った。

「ああ、だな！ あのバカが死ぬわきゃねえ。よし！ あのバカが基地居ない場合は、隣町まで行って警察と連絡をとる。くっそー、宝石ならイチイチ行かなくても連絡とれるんだが」

悔しそくに寛呂は地団駄を踏む。

「そだね……あ、そうか！ 私が街の人と接触出来れば、警察も呼べるよ」

衣類は気付いたようにそう言った。

「お、おお！ そうか。そうだな。よし、衣類は街の人に警察を呼んでもらう。俺は刹那が隣町へ警察を呼びに行く」

ふたりは同時にコクリと頷く。

「へまして死ぬなよ、神童」

「そっちこそ、刹那が居なかったからって泣かないでよ？」

そう嫌味を言い合った後、ふたりは背を向けた。

寛呂と賢呂は基地に向かって走る。

「兄さん、母さんと父さん、大丈夫かな」

走りながら、賢呂はそう心配そうに寛呂に尋ねる。

「さあな……どちらにせよ、今は俺達が出来る最大限の事をやるしかないんだ」

「……そだね」

寛呂の答えに、賢呂は頷き俯いた。

「見えてきたぞ！」

木々の上に建物が建てられている。それこそがフェニックス探偵団の秘密基地。

寛呂と賢呂は基地まで来ると、木の上から垂らしてある梯子を登り出す。

登り切ると、寛呂は刹那の姿を捜す。

「刹那っ！ 居るんだろ！ 早く出てこい！ 今、町がヤバい事になっただよ！」

寛呂はそう叫び、隅々まで基地の中を捜すが刹那の姿はなかった。「畜生！ どこにいったよ！ 自分で基地に呼び出しておいて！」

寛呂はそう悪態をつき、床に腕を着けた。

「……兄さん、これ」

賢呂はそう寛呂を呼ぶ。

「あん？」

寛呂は振り返り、賢呂を見る。賢呂は卓袱台の上に置かれた紙切れを指差していた。

寛呂は卓袱台に近づき、紙切れを手に取る。紙切れには何やら書かれていた。

「『ここで待機』………どういう事だ？」

寛呂は怪訝そうに賢呂を見る。

「えっと………そのまんまの意味じゃない？」

少し戸惑いながらも賢呂はそう答えた。

「ここで待ってるって事か？ 冗談じゃねえ！ 早くしねえと、街が燃えてなくなっちゃうってのに！」

寛呂は紙切れを片手で握り締め、くしゃくしゃにした。

「つか、あのバカは何処にいやがんだ！ こんな大事な時に！」

寛呂は窓を通して外を睨む。

「仕方ない、賢呂。隣町まで行って警察を呼びに行く」

「呼びに行くって………どんだけ離れてると思ってるの？」

気が狂ったんじゃないかと言うように賢呂は寛呂をまじまじと見つめた。

「普通に行けば、30分は掛かるが………」

寛呂はニヤリと笑うと、魔法石の詰まった木箱を指差し、

「魔法ならどうか？」

衣類達は住宅街へと戻っていた。

「どこも鍵が掛かってて開かない」

「こつちもあかないよお」

玄関扉が開くかを確かめた擬音と季衣がそう衣類に報告する。

「やっぱり、開かないかあ………仕方ない窓を割って入るしかないわね」

衣類は顎に手を当てそう考え込む素振りをする。

「衣類……黙ってたんだけど」

唐突に擬音が何かを躊躇ってというような感じに口を開く。

「ん？ なに？」

「あのさ、これ」

怪訝そうな顔をする衣類に擬音はポケットから取り出した何かを見せつける。

「これって……魔法石？ って、あんた！ まさか！」

衣類は擬音の手の平の上にある魔法石を見て、擬音を凝視した。

「ごめん！ でも、どうしても魔法使いたくて」

擬音は直ぐ様謝る。

「使いたくて……あんた、刹那の話聞いてた？」

衣類はもう呆れたような戸惑っているようなどっちにもつかない表情で擬音を見つめる。

「聞いてたよ……リーダーの話は聞かないわけじゃないよ」

項垂れたように顔を伏せる擬音。

「じゃあ、何で……」

「役に立ちたかったんだよ！」

擬音は訴えるようにそう叫ぶ。

「俺……リーダーとか寛呂とか衣類に守られてるのはもう嫌なんだ。確かに俺はまだ小等部だし、足が速いのしか取り柄ねえけど……でも、だから、魔法を扱えるようになりたいだよ。別に敵を倒せるような強力な魔法を使いたって訳じゃない。……ただ」

一旦息を置き、

「ただ、賢呂と李衣を守れるくらいにはなりたかったんだ……」

擬音は言い終えると、俯いた。

「擬音、あんた……もしかして、まだ、あの事引きづって……」

衣類は擬音を見つめ、そう言うが、

「……」

擬音は黙ったまま。

「……そっか。うん、判った。擬音のその気持ちよく判ったよ。刹那には内緒にしといてあげる」

衣類は優しい顔になるとそう言い、擬音の頭を撫でる。

「あーっ！ ぎおんばつかずるい！ リーもぉ！」

少し離れた所に居た李衣が擬音が頭を撫でられているのに気付き、不満そうに頬を膨らませ、駆けてくる。

「はいはい、李衣、良い子良い子」

「ふいー……」

衣類は駆けてきた李衣の頭を苦笑しながらも、撫でてやる。

「……ありがとう」

そんな二人のやり取りを眺めながら、擬音は小さく礼を述べた。

「まあ、でも、今回は魔法石持つててナイスよ」

衣類はそう親指を立てる。

「衣類、じゃあ、これ」

擬音は衣類に魔法石を渡す。衣類はそれを受け取ると、扉に対峙し、

「《リオ・フレア・ピアス》」

そう呪文を唱えた。

次の瞬間、衣類の拳から 正確には魔法石から炎の剣……いや、針が出現する。

衣類はその針を鍵穴にゆっくり突き刺していく。金属製の鍵穴は徐々に溶けていき、最終的には炎の針が扉を突き抜けた状態になった。

「よし、開いた！」

衣類は炎の針を消すと、擬音が扉のノブに手を掛ける。

「あちゃ！」

擬音はノブから手を引つ込めた。

「バカね。今、熱で溶かしたんだから熱くなっているに決まってる

でしょ？」

衣類はそう笑うと、握っていた魔法石をもう一度強く握り締め、

「《リオ・アクア・シャワー》」

呪文を唱える。

衣類の拳からメロンくらいの大ささの水の球が空中に浮かび上がり、その水球から無数の水の粒がノブを襲う。

ノブからはシューっと音と共に湯気があがった。

「これでもう大丈夫よ」

衣類はそう擬音に笑顔を見せる。

「流石だな。衣類はすごいや。魔法石一個でリオを二回使えるなんて」

擬音は感心したように衣類を見つめる。

「おねえちゃん、すごい」

李衣もきやつきゃつと姉を誉める。

「ふふ、ありがと。ただ、ちょっと、魔力を扱うのが上手いだけなんだけどね。まあ、今はそれは置いて、擬音、李衣、行くよ」

「アイアイサー！」

「あいあいさー！」

擬音と李衣は元気良く返事をした。

一方、雑木林では、

「本当に間に合うかな？」

賢呂は心配そうな顔でそう尋ねた。

「間に合う。俺を信じろ。こんだけ魔法石があんだ。グロウを使えば、15分いや、10分、いや5分で着いてみせる。着いたら、後は警察に任せば大丈夫だ」

「……」

寛呂がそう言うものの、賢呂は未だに心配そうな顔つきであった。「賢呂、みんなが心配なのは判る。だがな、今、俺達が出るのは

これしか無いんだ。もし、警察に通報出来れば、みんな助かるんだから」

「……そだね」

兄の言葉に賢呂は頷いた。そして、

「兄さん、絶対みんなを助けよう」

賢呂は強い意志を持った瞳で寛呂を見つめた。

「……ああ」

寛呂は一瞬、賢呂の豹変に驚くが、直ぐ様ニヤリと笑い頷いた。

それから、ポケットから取り出した魔法石を見つめ、

(とは言ったものの……グロウは中級魔法……一応、魔方陣は暗記してあるが、俺が扱うにはまだまだ未熟。……更に言えば、使えたとしても、グロウ程度じゃあ、15分、いや、18分は確実に掛かる。刹那か衣類が居れば、バルトニスで10分も掛からないのに……でも、やるしかねえ。今、俺に、いや、俺達に出来る事を)

寛呂は賢呂を一瞥した後、

「じゃあ、行くぞ」

そう言い、魔法石を握り締めた

「っ!?!」

その時だった。

雑木林の向こう、人影が歩いて来るのが見えた。

はためく漆黒のロープ。深く被ったフードからは口元だけが露になっっている。

そいつは寛呂達の前に立ちはだかると、フードから露になる口元がいやらしくくらいにニヤリとなった。

住宅の鍵を開けるのに成功した衣類達は扉を開け、中へと侵入する。

「誰か居ませんかー!?!」

衣類がそう叫ぶが、

「……」

返事はない。

「しょうがない。住人が居るか捜すよ」

衣類がふたりにそう言うと、

「了解」

「りょーかい」

真剣な表情で擬音が頷き、李衣も続いた。

衣類を先頭にふたりがついていく。

木造建ての家。壁や床に小さな傷などある事から、何か動物でも飼っているのか。

「なあ、衣類、ずっと気になってたんだけど」

「なに？」

慎重に前に進む衣類に擬音が話し掛けた。

「さっきのあの結界……どうして街全体を覆ってるって判ったんだ？」

「ああ、それね。簡単よ。結界つと言っても、結局は防御魔法の事だからね。あの透明な壁に魔力を感じたの。感覚的に、たぶんあれはバルトニス級の防御魔法……高度な魔法の割りに壁にあまり魔力を感じなかったから、膨張させてるじゃないかって思ったのよ」

擬音の問いに軽快な感じ衣類が答える。

「膨張？」

首を傾げる擬音。

「そ、膨張」

衣類は肯定する。

「魔法はね、同じ魔法でも全て同じ形をするわけじゃないの。感覚によつて、同じ魔法でも鋭くなったり、柔らかくなったり、大きくなったり、小さくなったりするのよ」

「ん？ じゃあ、なんでピアスとかブレスとかあるんだ？ 同じ魔法で形を変える事が出来るんなら、そんなの要らないじゃん」

「うーん、そうね。魔法の骨格自体は変わらないのよ。変わるのは

表面だけ」

「んん？」

衣類の説明にイマイチよく解らないといった様子の擬音。

「まあ、いつか擬音にも判る時がくるわ」

衣類はくすりと笑う。

「さて、今はそんな事より、住人を捜さなきゃ」

「あ、そうだな」

ふたりは頷くと、衣類と李衣、擬音と二手に別れて搜索する。

衣類と李衣が二階へと階段を上る。二階には三つの扉があり、衣類が一つの扉を開けた。

「違うか」

そこは何かの作業部屋であった。

衣類は扉を閉めると、後二つの扉を交互に眺め、

「李衣はあつちの部屋を見てきて」

その内奥の扉を指差し、李衣に優しくお願いする。

「うん、わかった」

李衣は素直に頷くと、その奥の扉へと向かう。

衣類は近くの扉のノブに手を掛け、開く。

「子供……部屋？」

その部屋には子供用の勉強机と二段ベッドなどがあり、一段ベッドの上には少年が布団を被って寝ていた。

「おねえちゃん！ 居たよー！」

李衣の叫び声が聞こえた。衣類は子供部屋から出ると、李衣の向かった奥の部屋へと向かう。

部屋に入ると、李衣がベッドの隣に立っており、そのベッドの上にはさっきの子供達の両親らしき男女が横になっていた。

衣類はそれを確認すると、ベッドに近寄り、寝ている住人の身体を揺らす。

「すみません！ 起きてください！ すみません！」

しかし、一向に起きる気配がない。口元に衣類は耳を寄せ、寝息

がちやんと聞こえるか確認する。

李衣はそんな様子を心配そうに見つめていた。

「生きてはいる」

衣類は真剣な眼差しで彼らを見つめ思考する。

(けど　やはり、魔法をかけられているみたいね。……強力な睡眠魔法か)

「居たって本当か!？」

部屋に飛び込むように入ってきたのは擬音。どうやら、先程の李衣の声を聞き、駆けつけて来たようだ。

「うん、居たには居たけど、強力な睡眠魔法にでもかかれているみたい。この状態じゃあ、明日にならないと起きないと思う」

「嘘だろ……そんなんじゃ、警察呼べねえじゃん。明日なんて、この街全部燃えてなくなっちゃうよ」

擬音は絶望したような顔をする。

しかし、そんな擬音とは裏腹に衣類は冷静な表情をしていた。

「大丈夫よ、擬音。これは想定内。もし、接触が出来ない場合を考えて、策は練っておいたから」

「策？」

擬音の眼が爛々に輝く。

「うん、簡潔に言っと私が宝石で警察を呼ぶ」

衣類は人差し指を立てにこりと微笑む。

「……そ、そうか！　衣類なら宝石を扱う事くらい楽勝じゃねえか！」

一瞬、呆然としていた擬音だが、衣類の言葉を理解してはしゃぐ。しかし、

「宝石って……どこにあんだ？」

重要な事に気付く擬音。

「そうね……宝石は自分の相棒みたいなものだから、大体寝る時もある自分の近くに置く物だけだ」

ベッドの辺りを見渡すが、宝石らしきものはない。

「畜生！ どこにあんだよ！」

擬音は乱暴に近くにあつた化粧台などを探すが見当たらない。

「子供……そうか、もしかしたら！ 擬音、ベッドの近くに小さな箱みたいなのない？」

「小さな箱？」

「とにかく探して！」

「あ、ああ」

困惑しながらも擬音はベッドの辺りを探す。

「李衣もお願い」

「うん」

様子を見ていた李衣も頷くとベッド近くを探しだした。

「あつた！ あつたよ、おねえちゃん！」

李衣はベッドの下に巧妙に隠されていた四角い変な模様の入った小さな箱を掲げていた。

「ナイスよ！ 李衣！」

衣類は李衣に近寄り、箱を受け取ると、李衣の頭を撫でてやる。

「ふいー……」

気持ち良さそうに撫でられる李衣。

「よっしゃ！ これで警察を呼べる！」

擬音がガッツポーズをとった。
が。

「まだよ」

衣類は箱を手に入れたにも関わらず、未だ深刻な表情をしていた。
「どうしたんだよ？」

擬音は怪訝そうに尋ねる。

「この箱……鍵かかっている」

衣類は箱の蓋を開けようとするが、ビクともしない。

「鍵！？ なんで！？」

擬音は驚愕した。

「たぶん、子供が居るからだよ」

「はい？」

よく判ってないらしく擬音は首を傾げる。

「子供が勝手に宝石を持ち出さない為……さつき子供部屋を見たけど、擬音と同じくらい歳の男の子が居たんだよ。丁度、魔法に興味津々になる頃だろうし、その子が宝石を盗まないように箱に鍵をかけて隠したんだと思う」

衣類がそう言つと、擬音はバツの悪そうな顔し、鼻ポリポリとを掻いた。

「じ、じゃあ、どうすんだ？ 鍵開いてないんだろ？」

擬音は話を変えるようにそう慌てたように言った。

「そうね……擬音、貴方も魔法石持つてないの？」

衣類は少し考える素振りを見せ、擬音にそう尋ねる。

「すまねえ、もうない。あの一つだけ……」

申し訳なさそうに顔を伏せる擬音。

「そっか……なら、この方法しかないわね。少し時間が掛かるけど衣類はそう眩きながら、前髪にしていた髪留めを取ると、それを真っ直ぐに伸ばした後、グネグネと曲げる。

「衣類、お前なにしてんの？」

擬音は衣類の奇行を怪訝に思い尋ねた。

「あ、これ？ これはね、ピッキングよ」

衣類はそう言いながら、グネグネになった髪留めを箱の鍵穴に射し込む。

「ピッキングつて……衣類、お前、そんなのどこで覚えたんだよ！ 驚いたように擬音は衣類を見つめる。

「うーん、刹那から教えて貰ったのよ」
カチャカチャと髪留めを動かしながら、衣類は擬音の問いに答え
た。

「リーダーから！？ ふえー……流石、リーダー。ピッキングも出

来るのか」

感心したように擬音は呟く。

「感心する所じゃないよ。こんな犯罪染みた事。私も教えて欲しいとは思わなかったし」

衣類は少し拗ねたように呟く。

「じゃあ、なんで知ってんの？」

不思議そうに尋ねる擬音。

「あの時はこれが悪い事だとは知らなかったの！ 刹那のヤロウ！
あの後、お母さんに自慢したら、滅茶苦茶怒られたんだからね！
この！ 開けっ！」

衣類の憤怒が堪えたのか、ガチャツと施錠が外れる音がした。

「開いたっ！」

「よっしゃ！」

「おねえちゃん、すごい！」

衣類は早速とばかりに蓋を開けた。

「……あつた」

蓋を開けたそこには、エメラルドに輝く宝石と紅い深紅に輝く宝石の二つあった。

衣類はエメラルドの方を取り出すと、

「擬音、これはあんに」

衣類は真剣な表情で擬音に宝石を渡す。

「うん」

擬音は息を呑みながらもエメラルドの宝石を受け取る。

「判つてるとは思うけど、擬音、あんたは初級魔法しか使っちゃ駄目だからね」

「判つてる、俺もそこまで馬鹿じゃない」

そう衣類の忠告に擬音は真剣に頷き、隣で「すごい、ほうせきだあ」と呟いている李衣を見つめた。

「俺は二度と……失敗はしない」

強い意志の籠った瞳で衣類を見返す。

「……………うん」

衣類はそんな擬音を見て頷くと、箱からも一つ一つの深紅に輝く宝石を取り出し、それを見つめた。

「よし、警察とコンタクトを取るわ」

衣類はそう言うと、

「おうっ！ 頼むぜ」

「がんばって、おねえちゃん！」

ふたりはそう声援する。

衣類は頷くと、宝石を握り締め、呪文を唱える。

「《シー・コンタクト》」

衣類は意識を隣街の警察へと集中させる。

「……………さ……………です……………どうか……………たか？」

宝石は一瞬熱を帯び、そう男性の声途切れ途切れに聞こえてきた。

「繋がった！」

「でも……………」

ちゃんと繋がっていない。

「たぶん、妨害されてる」

衣類は悔しそうに呟く。

「……………か……………したか？」

その声が聞こえ、衣類は慌てる。

「助けて下さい！ 街が焼けてるんです！ 助けて下さい！」

そう衣類は叫ぶが、

「……………って……………てるですか？ ……くわかり……………せん」

向こうにはちゃんと伝わってないようだ。

「くっそー！ どうすんだよ！ どうすれば良いんだよ！」

擬音は地団駄を踏む。衣類も下唇を噛み締めた。

李衣はそんなふたりの様子を見て、

「たすけて！ たすけて！ たすけて！ たすけて！ たすけて！ たすけて！ たすけて！ たすけて！ たすけて！ たすけて！」

衣類の持つ宝石に向かって必死に泣き叫んだ。

「……」

衣類はそんな李衣を見て、

「そうか……そうだよ！ 李衣！ そのまま、叫び続けて！」

何かを思い付いたように李衣を促した。

李衣は一瞬ぼんやりとしたが、嬉しそうに頷き、

「たすけて！ たすけて！ たすけて！ たすけて！」

必死に叫んだ。

「なに？ どうしたんだ？」

擬音は急に活気付いた衣類を見て尋ねる。

「あ、うん。あのね、この通信、別に一切繋がってないってわけじゃないじゃない？」

「ん？ だから？」

イマイチ理解していない擬音。

「だからね、途切れ途切れだけど繋がってるの。何度も同じ言葉を繰り返せば」

「そうか！」

やっと理解した擬音は手を叩く。

「何度も同じ言葉を繰り返せば、途切れ途切れだけど、伝えたい一つ一つの言葉が伝わるって事だな！ それで、向こうが組み合わせれば！」

「そう、私達が助けを求めている事が伝わる。場所は通信の逆探知で特定されるし、それに街全体に結界が張られているんだし、警察は確実に不審に思うはず」

衣類はニヤリと笑う。

「流石は神童だな」

擬音は感服したというように衣類を見る。

「まあね」

衣類の舌を出して微笑む姿は小悪魔に似ていた。

隣街の警察署より、

「……けて！……す……た……て！……たす……」

「助けて……か？」

制服を身に纏った男がそう呟く。

「砂！ 至急、この通信を逆探知しろ！」

男は立ち上がると、後ろで書類仕事をしていたまだ若い新米にそう命令する。

「はい！」

新米は頷くと、宝石を取り出し、逆探知を試みた。

衣類達は宝石で隣街の警察と連絡を取った後、すぐさま家を出た。

「衣類、これからどうするんだ？」

擬音が玄関の扉を閉め、そう衣類に尋ねた。

「そうね。大人しくこの家で待っておくのが無難なんでしょうが…

…」

衣類は物思いに耽るように顎に手を当て、街の中心部 燃えて
いる辺りを睨む。

「いつ敵がここに攻め込むかわからない現状、今すぐにこの結界から
抜け出した方が良いわね」

李衣は不安そうに姉を見つめ、ぎゅっと衣類の服の裾を掴む。

「抜け出すつたって、どうやって抜け出すんだよ？」

擬音も余裕が無くなってきたのか、情けない声を出した。

「そうね。擬音、結界ってどういう物を想像してる？」

衣類はふいに擬音の方を向く。

「えっと……確か防御魔法の事だろ？ お前、前にそう言ってなか
った？」

擬音は暫く悩む素振りを見せ答えた。

「正解、その通り。結界は防御魔法と同じ。ただ、呼び方が違うだ

けね。防御魔法には二通りの使い方があって、一つがみんなが知ってる敵の魔法を防ぐ事。もう一つが今私達がされてる捕獲用。まあ、捕獲の場合、防御魔法は術者を中心に展開されるから、自分も防御魔法の中に居る事になるんだけどね」

衣類は人差し指を立て、説明する。

「で、今の状況で私達は二通りこの結界から脱け出す方法がある」「本当か!？」

擬音は期待の眼差しで衣類を見つめる。

「うん、ひとつ目がこの結界を作った人を殺す」

「……こ、殺すって」

躊躇なくそう言う衣類に尻込みする擬音。

「つてのは冗談だけど、相手を気絶させるとかかな。でも、私達にはたぶん無理。バルトニス級を使う相手に勝てるわけないし」

「じゃあ、どうすんだよ」

擬音は期待を裏切られ、失望したような顔になった。

「まあ、そんなに気落ちしないで。まだ二つ目の方法があるでしょ」

「そ、そうか。じゃあ、その二つ目の方法ってのは……」

擬音はまた期待の籠った眼差しへと戻る。

衣類は不敵にニヤリと笑うと、告げた。

「この結界をブチ壊す」

「ブチ壊すって……そんな事出来るのか？」

衣類達は街の正門に向かって走り出していた。

「可能よ。言ったでしょ？ この結界はバルトニス級の防御魔法。それだけなら、破壊するのは難しいけど、膨張している。魔法は形を変えられても魔力自体は変化しない。つまり、膨張して面積が広くなった分、魔力が均等に行き渡り、強度が下がる」

衣類は李衣の手をギュッと握り締めながら、擬音の問いに答えた。それから、上空を一瞥すると、

「更に言えば、これだけ膨張してれば、《ヘル》程度で壊す事が可能」

不敵な微笑みを浮かべる衣類。

「おお！ じゃあ、俺達脱出出来るんだな」

「ええ、それにもうすぐ警察が来ると思うし、後は保護を求めて避難すれば」

「おかさなたちたすかる？」

李衣が心配そうに尋ねた。

「うん、警察が着たら助かるよ」

衣類は李衣に優しく微笑むと、前方を向く。

（燃えているのは中心部だから、お母さん達は大丈夫なはず……でも、中心部の人達は……）

衣類は俯くと下唇を噛み締めた。前髪に隠れ、どんな表情をしているのか判らない。

（この街全体に結界が張られてる。更には街のみんなには強力な睡眠魔法がかけられていた。それはつまり、こんな事をした犯人が居るという事。何が目的なのかは判らないけど……でも、確実に判る事は何者かがこの街を壊すつもりだと言う事。くっ、こんな一大事に刹那は何をやっているの？ 貴方だけが頼りなのに…… 刹那）

「見えた！ 衣類、門が見えた！」

擬音が叫び、衣類は我に返る。

門の前に来ると、衣類はポケットから紅に輝く宝石を取り出し、

「《ヘル・ウイン・トルネード》」

衣類の拳を中心に風が回転する。そして、小さな竜巻が起こり、門の間に向かっていく。

パリーンッ！

そんな硝子の割れるような音が鳴り響く。

音が鳴った所から透明な硝子の破片のような物が飛び散り、そし

て、周りの結界が徐々に歪むように崩れ始めた。

「よっしゃ！ 結界が壊れた！」

擬音が小躍りし出す。

「よし、擬音、李衣！ このまま避難するよ！」

「了解！」

「りょーかい！」

衣類がそう促すと、元気の良い返事が返ってくる。

そして、衣類達が走り出そうとした時だった。

「オイタが過ぎるじゃないかな。君達」

突然、目の前に現れた。

男のような女のような中性な声色。

黒いローブを纏い、深く被ったフード。

「なあ、グロース？ 君もそう思わない？」

中性な声色の黒ローブは衣類達に向けて……いや、衣類達の背後に向かつてそう問う。

衣類は直ぐ様振り返った。

「少し口を慎め。任務中だぞ。それに名前を出すな、バカが」

背後に居たのはガタイの良い同じように黒ローブに深くフード被った人影。

前に居る黒ローブとは違い、低い重みのある声色。

「いいじゃーん。堅い事言うなって。どーせ、こいつら死ぬんだからさ」

中性な声色の黒ローブはあっけらかんとそう言う。

衣類と擬音はビクツとなる。李衣は衣類にしがみつき、怯えたように顔を衣類の腹部に埋めた。

「盗聴されていたらどうする。そういう事も想定した上で言っているんだよ、バカが」

ガタイの良い黒ローブ　グロースはそう冷たく言い放つ。

「ちえー、わかりましたー。もう、軽率な事は致しませーん」

若干不服そうにそう中性な声色の黒ローブは言くと、ローブの内

側から何やら取り出した。

「んじゃ、仕事しまーす」

拳から微か見える青い光沢。

衣類はそれを目撃して、直ぐ様持っていた深紅の宝石を握り締めた。

「《グロウ・ウイン・ブレス》」

中性な声色の黒ローブがそう呪文を唱えた。その瞬間、握っていた青い宝石から複数の風の刃が飛び出す。

そして、衣類達を狙う。

「《ヘル・シャイン・シルド》」

衣類は呪文を唱え、シルドを展開する。

危機一髪。

風の刃が衣類達を襲う直前、衣類のシルドによって風の刃は弾かれた。

「っつ!?!」

二人は驚愕する。

「《シャイン》かよっ! ああの伝説の《シャイン》!?! ヤベッ、

この娘、何者!?!」

興奮したように中性な声色の黒ローブが叫ぶ。

「《シャイン》……彼女があ……なるほど」

グロースは意味深にそう呟いた。

衣類はふたりがそんな会話をしている間にも、思考を巡らせていた。

(失態だ。挟み撃ちは辛い。どうやって逃げる? 《アルテイルデッド》を使って……いや、たぶん、彼らは相当の手練れ。私程度ではない。じゃあ、どうやってこの状況を打破する? 《バルトニス》で逃亡は? 駄目だ。例え、《バルトニス》で逃げようとしても、追い付かれるのが落ち。じゃあ、どうする? どうすれば良い?)

衣類は思考を巡らせるが、最善策が浮かばない。

「お嬢ちゃん、なんか他にも魔法無いわけ？　つか、何が使えんの？」

中性な声色の黒ローブが楽しそうに衣類にそう尋ねた。

「……」

衣類は警戒したように構える。

「ちえー、つまんねえ」

そんな衣類の態度に失望した中性な声色の黒ローブはつまらなさそうに溜息をついた。

「面白いもん見れるかと思ったのに。しゃーねえ、とっと終わらす

かなあー《ヘル・ウイ》

「待て！　そいつは」

隣に居たグロースが中性な声の男　黒ローブを呼び止めようとしたその時だった。

「トロいな《ヘル・ウイン・ブレス》」

突如、そんな声と共に複数の風の刃が黒ローブを襲う。

「なっ！　《セル・ウイン・シルド》」

黒ローブは咄嗟に風のシールドを展開するが、防ぎきれず、黒ローブを風の刃が引き裂く。

「ぐっ！」

引き裂かれた腕や脚からは血流れ、ローブに染み込む。

「トロいなあ。マジでトロい」

突如、衣類達の真横に現れた声の主。

長い綺麗な金髪に整った容姿。ほぼ白で構成された上品な服装。

所々に金の飾りがあり、肩には金色の鳥の紋章が描かれ、更には白いマントを羽織っている。

「き、貴様は魔法騎士団ゴールデンバードの……瞬速の風使い！」

グロースは白いマントの男を睨みつける。

「ふふ、御丁寧にご紹介ありがとうございます。私はベル・ギリオン。またの名を瞬速の風使いと言います」

「何故、お前がここに！」

黒ローブは傷口を押さえながら、乱暴に問う。

「何故と言われてもねえ。彼女達の連絡を承けて来たとしか言い様がないね」

少しおどけた口調でギリオンは答えた。

「違う！ 貴様のような他国の騎士が何故この国に居るのかを訊いているんだ」

グロースは憎々し気にギリオンを睨む。

「何を今さら……検討はついているだろう？」

ギリオンは大袈裟に両手を広げ、挑発するような目付きでグロースと黒ローブを見た。

「……くっ」

二人は苦虫を噛み締めたような顔をすると、攻撃体勢へと入る。

それを見て、ギリオンは余裕の微笑みを浮かべたまま、握っていた黄色に輝く宝石を確認するように握り締めた。

「《ヘル・サンダー・ブレス》」

中性的な声が闇夜に響く。黒ローブの袖口から複数の青い雷の刃がギリオンを狙い撃つ。

「《ヘル・フレア・ブレス》」

隣にいたグロースも呪文を唱えた。袖口から複数の炎の刃が目標のギリオンへと襲い掛かる。

「《ストリオル・グラン・シルド》」

しかし、まるで予め予測していたかのようにギリオンは呪文を唱えた。

地面から土の盾が構成され、ギリオンを狙った青い雷の刃と炎の刃を防いだ。

「何！？」

黒ローブは驚愕したように眼を見開き、自分の呪文を簡単に防いだギリオンを凝視する。同じように戸惑い身動きの出来ないグロース。

ギリオンはそんな隙を見逃さない。

「《バルトニス・アクア・ブレス》」

ギリオンは続けて呪文を唱え、彼の持つ黄色の宝石から無数の水の刃が黒ローブ達に襲い掛かった。

「《セル・ウイン・シルド》」

咄嗟にシールド展開するが、あまりの水の刃の多さに完全防ぎ切れない。

「ぐはあっ!」

「ぐうっ!」

水の刃は容赦無く彼らを引き裂く。黒ローブとグロースはその場に倒れた。

しかし、彼らに切り傷は無い。あるのは水圧で出来た痣だけだ。

「な……何故、殺さない」

うつ伏せに倒れ、ギリオンを睨みながらグロースは呻く。

「まあ、殺しはしないさ。私は捕まえるのが仕事だからね」

ふふんとギリオンは余裕の笑みを溢した。

「……すごい」

傍から様子を見ていた衣類は思わず言葉を洩らす。

(これが……ルクセンブルクの魔法騎士団……ゴールデンバード)

「すごい……」

「すごい」

擬音や李衣も尊敬の眼差しでギリオンを見つめていた。

「君達、大丈夫かい?」

ギリオンは黒ローブのふたりに縛り魔法を使用した後、こちらに近づいてきた。

「あ、はい!」

擬音が元気良く返事をする。そんな擬音を見て、微笑みを溢すと、衣類の方を向く。

そして、真剣な面持ちになり、

「君が衣類ちゃん。琉・衣類ちゃんだね?」

「え? はい。そうですけど」

衣類は戸惑う。

(どうして……この人、私の事を)

「衣類、知り合いなのか!？」

隣に居る擬音は驚愕したように衣類に尋ねた。

「え? いや、私は知らない」

「すまないが説明は後程する。まず、私について来て欲しい」

ギリオンはそう遮るように言うと、手を差し伸べる。

「え?」

いきなり手を差し伸べられ、衣類は訳が解らないという表情。

一方、ギリオンは焦った様子で街の方をチラチラと確認する。

「捕まってる」

ギリオンの促しにおずおずと衣類はギリオンの袖を掴もうとした

その時だった。

ドスッ……

「げほっ……」

ギリオンが呻いた。

腹部に唐突な激痛が走ったのだ。ギリオンは視線を自分の腹部に向ける。

そこには巨大な氷柱が突き刺さっていた。ゴールデンバードの真っ白の正装は氷柱を中心に赤い染みが広がって行く。

「な……」

ギリオンは足をふらつかせながらも、背後を振り返る。

「お……まえは……」

そこには黒ローブの人影が三人居た。真ん中に居るひとりだけフードを被っておらず、白髪の間違ったオールバックに堀の深い顔は無表情。その男の手には黒い宝石が握られていた。

ギリオンは自分の腹部を貫かせた氷柱を出現させた相手を認める

と地面へと倒れた。

「い……」

衣類はそんな目の前の光景に怯えたように倒れたギリオンから後じさり、

「いやああああああ！」

悲鳴を上げた。

「琉・衣類を確保しろ。他は殺せ」

男は衣類の悲鳴を無視して、傍らに居る黒ローブ達に命令する。

「はっ」

黒ローブ達の袖口から青い光沢が煌めく。

「《グロウ・プラント・バンド》」

ひとりがそう呪文を唱えた。地面から木のツルが突き出て、触手のように衣類達に巻き付く。

「うっ……」

ツルに巻き付かれ、身動きがとれなくなった衣類は何とかしてポケットに入っている宝石を取り出そうとするが、上手くいかない。

「糞っ！ この！」

「いたい！ いたいよー！」

一方、擬音は奮闘するもツルから逃れる事が出来ない。李衣はツルの締め付けに悲鳴を上げた。

「李衣！ 李衣い！ 嫌、放して！ 李衣いい！」

衣類はそう叫ぶが、黒ローブ達は無視して、擬音と李衣に宝石を持った手を翳す。

擬音の顔が恐怖に染まる。李衣は声を出して泣き始めた。

「嫌っ！ ……やめて、お願い！」

衣類は必死に懇願する。

しかし、黒ローブ達は無情にも呪文を唱えた。

「《ヘル・サンダー・ピアス》」

黒ローブの袖口から青い閃光が走る。それは狙ったかのように擬音と李衣の胸 心臓を目掛けて一直線。

「いやあああああああ！」

衣類の甲高い悲鳴が響く。

青い閃光が擬音と李衣を貫こうとした刹那、

「《バルトニス・グラン・シルド》」

呪文の唱える声が聞こえ、土の盾が展開し、ふたりを護った。

「ん？」

白髪の男は怪訝な表情を浮かべ、呪文が聞こえた方を見やる。

「《グロウ・サンダー・ピアス》×3」

更に声は呪文を唱える。

何処からか三つの青い閃光が黒ローブと白髪の男を狙う。

「《グロウ・グラン・シルド》」

「く……《グロウ・グラン・シルド》」

白髪の男とひとりの黒ローブは咄嗟にシールドを展開して青い閃光を防いだ。

「ぐっ……」

しかし、ひとりの黒ローブは遅れ、青い閃光は黒ローブの心臓を貫いた。

黒ローブは地面に倒れる。息はあるが、虫の息である。

「……ふん」

白髪の男は倒れた黒ローブを軽蔑の眼差しを向けた後、

「出てこい。この裏切り者め」

そう冷たく何処か居る声の主に向かって言い放った。

ガサツ……と音と共に現れたのは、黒ローブを纏った中年の男。

ボサボサの髪に若干生えた髭。

「……!?!」

衣類は驚愕の顔を浮かべる。

「なんで……」

衣類はそう信じられないというように、瞳は揺れ動き、動揺していた。

「なんで……先生が？」

そう、白髪の男達と対峙するように立っている中年の男は、正しく衣類の学校の教師だった。

(それに……裏切り者って)

「まさかお前が裏切るとはな……」

白髪の男は冷たい眼で教師を睨む。

「私は教師なんですね。教え子を護るのは当然でしょう？ ……古・

龍華」

教師も負けじと睨み返した。

(こ・りゅうげ……古？ ……まさか、ね)

「ふんっ……家のご恩も忘れたか。恩を仇で返すとはこの事だな。

……おい、そいつを殺せ」

古・龍華と呼ばれた男は軽蔑したように吐き捨てた後、隣にいた黒ローブに命令する。

「はっ」

黒ローブは頷くと、呪文を唱える。

「《ヘル・ウイン・ブレス》」

「《ヘル・アクア・ブレス》」

教師も対抗するように呪文を唱えた。

一方、衣類はそんなやり取りを眺めながらも、ポケットを探ろうとしていた。

しかし、なかなか届かない。

(後、少し……後、少しなのに)

衣類は古・龍華を警戒しながら、必死に手を動かす。

そして、やっと手がポケットに届く。

(やったっ！)

宝石の冷たく固さを感じている時だった。

「何をしている？」

いつの間に近づいたのか、古・龍華が目の前に居た。

「そうか」

古・龍華は何か気付いたように頷くと、

「最後の悪足掻きでもしようとしたか」

嘲笑を浮かべ、漆黒の宝石を取り出し、そして、

「二度とそんな事をしないよう、腕を切り落としてやるう」

不気味な笑みを浮かべ、そう言った。

衣類は戦慄する。

白髪の男は本気でそう言っている。彼は躊躇無く衣類の腕を切るだろう。

「《ギオ・ウイン・ブレス》」

衣類は咄嗟に呪文を詠唱。

風の刃が手を突っ込んでいたポケットを引き裂き、更にツルを斬り刻み、衣類を解放した。

「くくく、逃がしはせん。《グロウ・ウイン・ソード》」

古・龍華は愉快そうに笑い、呪文を詠唱。拳から風の剣を出現させた。

そして、衣類目掛けて振り上げ、降り下ろす。

「《グロウ・シャイン・シルド》」

衣類はシルドを展開。古・龍華が降り下ろした風の剣は衣類のシルドによって弾かれた。

「ほう……これが《シャイン》、光属性。……息子から聞いてはいたが……実に素晴らしい」

古・龍華は感心したように衣類のシルドを眺めた。

（チャンス！ 隙が出来た！）

「《ギオ・ウイン・ブレス》」

衣類は呪文を詠唱。

風の刃は擬音と李衣のツルを引き裂いた。

「イデッ」

若干、浮いていた擬音は地面に尻餅をつく。李衣はあまり高くなかったので着地に成功。

衣類は続けて詠唱する。

「《グロウ・サンダー・ピアス》」

衣類の拳から古・龍華目掛けて青い閃光が走る。

古・龍華は若干冷や汗を掻きつつ、

「《グロウ・グラン・シルド》」

シルドを展開。青い閃光は土の壁に激突し、消滅する。

「くくく、素晴らしい。素晴らしいぞ……流石は琉家の神童。あれだけの高度な呪文を使っておきながら、まだ呪文を詠唱するとは……しかも、連続で。尋常ではないな、その気力と集中力」

古・龍華は嬉しそうに笑う。

「……欲しい。お前が欲しい。どうだ？ 私のモノにならないか？ さすれば、その者達に手出しはせん。どうだ？」

古・龍華は誘うように衣類に手を差し伸べる。

しかし、一方、衣類は違う事に思考を巡らしていた。

（話の内容から、彼らの目的は私。いや、正確には《シャイン》。先祖代々流家に受け継がれてきたこの《シャイン》は、希少で使い方によっては危険な魔法だってお母さんが言ってたけど……、本当だったみたいね）

衣類は冷や汗を垂らす。今まで何気無く使っていた《シャイン》。母親には《シャイン》は特別な魔法で狙う者も多いから、なるべく使用するなど言われていたが、今更ながらその忠告をちゃんと聞いていれば良かったと衣類は後悔した。

（とにかく、今は李衣が逃げる方法を考えねば……）

衣類は古・龍華の恍惚な瞳を見つめると、

「本当に？ 本当に、李衣達に手を出さないと約束できるの？」

「ああ、約束しよう。彼らには手を出さない。お前が私のモノとなる約束できるなら、更には彼らを隣街の安全地まで送り届けてやる」

古・龍華は笑みを浮かべ、頷いた。

「……いいわ。それで」

衣類は暫く沈黙した後、承諾した。

「な……！ 衣類、お前……」

そんなやり取りを見ていた擬音が驚愕する。そして、顔は怒りに

歪ませ、

「ふざけんなっ！ 衣類、お前、どうしちゃったんだよ！ そいつは、そいつらは街を燃やした奴らなんだぞ！ そんな奴の仲間になるって言うのか！」

叫んだ。

しかし、衣類はそんな擬音に見向きもせず、古・龍華を見つめたまま、

「嘘をついたら、殺すわよ」

そう離れている擬音達に聞こえないくらいの音量で囁いた。その囁きはその見た目とはそぐわない鋭い殺意が籠められている。

古・龍華は奮えた。力の差は歴然としていて、更にはこの状況に拘わらず、彼女から戦慄するような敵意と殺意を感じたからだ。古・龍華はますます衣類が欲しくなる。

「ああ、誇りに懸けて誓おう」

古・龍華は恍惚な笑みを浮かべながら、そう宣言する。

衣類はそれを聞き、安堵する。それから、視線を擬音と李衣達に送る。そこには親の仇のように憎しみを込めた瞳で睨む擬音と不安そうな表情の李衣が居た。

(これで……一先ずは大丈夫。擬音と李衣の安全は確保された。私が彼らに従っている限り、李衣達の安全はほぼ絶対。私が見た限り、この男が犯人グループの主格のはずだから)

衣類は擬音と李衣から視線を外すと、戦闘している教師と黒ロ―ブに視線を向ける。

(……先生)

衣類は心配そうな表情で二人の戦闘を見つめる。

現在、教師の方が不利だ。黒ロ―ブとの一対一ならば、余裕の勝ちを得ただろうが、古・龍華が横槍を入れている。しかも、強力な魔法ばかりなので、その度に防御呪文を展開する為に確実に気力を削られていく。

魔法とは魔法石に籠められている魔力と人間の気力(精神力)に近

い)が交わった時、具現化する。

故に膨大な魔力が籠められた魔法石を持っていたとしても、自分の気力(精神力)によって、使用できる魔法の強さ、回数は限られてくるのだ。

(……もう、バルト二ス級を四回も……駄目だ。続けてあんなに……気力なんて持たない……あのままじゃ、死んじゃう!)

衣類は唇の下を噛み締める。衣類は迷っていた。古・龍華とは李衣達に危害を加えない代わりに仲間になるという約束をしている為、教師のフォローをすれば、約束を反故した事になる。そうなれば、古・龍華は確実に李衣達を殺す。

しかし、ただ何もせず指を食わえていても、教師は殺されるのは時間の問題。

(どうすれば? どうすれば良いの……? 刹那)

衣類は顔を片手で覆い、必死に思考を巡らせる。

「ぐはっ……!」

衣類はハツと手を除け、顔を上げる。

「……っ!？」

何とか悲鳴を上げるのを堪える。黒ローブと対峙するそこには肩から血を流した教師が倒れていた。

「……く」

それでも、教師は立ち上がり、ふらふらした足取りで、宝石を構える。

(先生……なんで、そこまでして……)

衣類はふらふらと今にも倒れそうな教師を見つめる。大きな瞳は動揺したように揺れ動いていた。

『私は教師なんでね。教え子を護るのは当然でしょう?』

不意に思い出させる教師の言葉。衣類は更に動揺する。

（私は……何をやっているの……？ 命懸けで私を守るつもりとしてる人を……何で……何で助けられないの？ 私は……私は）

黒ローブはそんな教師に更に呪文を唱えた。

「《ヘル・サンダー・ピアス》」

青い閃光が教師目掛けて走る。正確に心臓を捉えて。

古・龍華はつまらなそうにそれを見つめ、

擬音は「やめろおおお！」と叫び、

李衣は顔を両手で覆い隠し、

黒ローブは口元をつり上げ、

衣類は眼を見開き下唇を噛み締め、

教師は迫る青い閃光に悲しみの微笑みを浮かべた。

「《バルトニス・プラント・ピラ》」

青い閃光が教師を貫く直前、巨大な大木が出現した。出現したというより、地面から突き出てきた。

青い閃光は巨大な大木に突き刺さるが、貫くまでには至らない。

「っ!？」

古・龍華は振り返る。そこには拳を突き出した衣類が荒い息をしながら、立っていた。

「お前……どういうつもりだ？」

古・龍華は冷たくそう尋ねるが、内心驚愕していた。あの連続で魔法を繰り出していたのに拘わらず、まだ魔法を、しかも、バルトニス級を詠唱するとは、古・龍華は衣類に恐怖すら抱く。

「どうもこうも、不愉快よ。彼、私の教師なの。それが目の前で殺されたら、堪ったもんじゃないわ」

衣類は不敵な表情でそんな事を言う。

「き、貴様あ！ 調子に乗るのもいい加減に」

黒ローブがそう怒りを顕にするが、それを古・龍華は手で制す。

「確かに。しかし、約束には彼らを安全を確保できれば良いと言うものだったか？」

それから、古・龍華は冷静に尋ねる。しかし、その冷静な言葉の中には、擬音達がどうなっても良いのかという脅しが含まれている。それでも、衣類は気にした様子もなく、

「あら？ 貴方達は子ども私にトラウマを植え付けるつもり？

あまり好きでは無かったけど、一応、私の先生だし、目の前で殺されたら、私……なにし出すか判んないわ」

衣類は「《ヘル・ウィン・ソード》」と呪文を唱え、風の剣を出現させると、自分の首に押し当て、

「自殺……しちゃうかも」

天使のように微笑んだ。

「っ!？」

古・龍華は冷や汗を浮かべた。黒ローブも齒軋りをたてる。

「脅し……か？」

古・龍華は衣類を睨みながら尋ねた。

「脅し？ 違うわ。お願いよ」

衣類は不敵に笑う。

「そんなお願い訊くとでも？」

「あら、そう？ じゃあ、死ぬわ。これで伝説の《シャイン》もおしまいね。可哀想に……貴方、大切な人とは二度と逢えないわ。残念。……きつと、死んでも逢えないわね。だって、貴方、地獄行きだもの」

「っ!?!?!？」

古・龍華は異常な動揺を見せた。瞳は揺れ動き、口は開いたまま、閉じれない。

「……いつから気付いていた？」

古・龍華は震える唇で尋ねる。

「いつからというより、《シャイン》を欲しがる時点で大体判るわ。……《シャイン》は人を癒し、生き返らせる事が出来る特殊な魔法。

それを欲しがるなんて、誰か生き返らせたい人が居る事ぐらいしか思い付かないもの。それとも、知らないとも思った？ ふふ、

馬鹿にしないで欲しいわね。神童と呼ばれる私が何の効果があるかも知らない魔法なんて使うわけないでしょう？」

衣類は顎に指を当てそう不敵に微笑む。

「チツ……………」

古・龍華は舌打ちすると、部下に告げる。

「その男の宝石を奪った後、傷を癒せ」

「な……………！ いいんですか？」

「構わん。木に縛っておけば、何も出来んだろう……………これで良いかな？ 神童のお嬢さん」

古・龍華は少し皮肉を込めたように衣類を見る。

「ええ、充分よ。後は李衣達を隣街まで案内してくれるなら、私を煮るなり利用するなり好きにするばいいわ」

衣類は不敵な笑みを浮かべたまま、そう答えた。

衣類達が立ち去り、残されたのは、木に拘束された教師と血の湖化した地面に倒れているギリオンだけだ。

唐突にギリオンの眼が開く。

「……………ん」

呻きながらも、起き上がる。それから、傷口を探った。

「……………っ！」

ギリオンは驚愕する。何故なら巨大な氷柱で貫かれたはずの傷が塞がっていたからだ。

「傷が……………治ってる」

辺りを見渡すが、奴らや少女達の姿は無い。

「クソッ！」

ギリオンは悪態をつきながら、宝石で仲間と交信を取る為、ポケットを探るが、見当たらない。

「私は……………俺は……………何をやっているんだ」

絶望したようにギリオンはそう呟く。

自分がこうして生きているという事は奴らに見逃されたという事だ。

更に傷口が塞がっていたという事はあの少女が自分の傷を癒すよう頼んだのだろう。自分が出血大量で死なないように。

「畜生……」

助けるつもりだった少女に助けられたのだ。

「畜生オオオオオオオオ！！！」

心の底からギリオンは自身の無力を恨んだ。

古・龍華一行は隣町に続く道を進む。

「……」

衣類、擬音、李衣は手首に拘束魔法を掛けられた状態で黒ローブとグロースに挟まれ、歩いている。

擬音は下唇を噛み締め、衣類を睨むが、衣類は無視したように前を見つめるままだ。

「チツ……あの野郎、ブツ殺してやりたかったのに」

悪態をついたのは中性声の黒ローブ。あの野郎とはギリオンの事であろう。

「仕方ないだろう。このお嬢さんの条件なんだから」

それに答えたのはグロース。

「……」

中性声の黒ローブは衣類を睨むと、フンツと鼻を鳴らした。

「私語は慎め。奴らは既に動いているんだぞ。任務に集中しろ」

先行していた古・龍華が冷たく注意する。

「す、スンマセン」

「申し訳ありません」

慌てて二人は恐縮したように謝った。

「……」

衣類は古・龍華を見つめながら思索する。

(やはり、この男が組織の主格か……この男の目的は私のシャイン。つまり、誰かを生き返らせる事にある。それは判った。でも、誰を生き返らせようとしているのかが判らない。ただ、この男の愛する者だけを生き返らせようというだけなら)

衣類は黒ローブ達を見渡し、

(普通、こんなにも人が動くはずがない。やはり、彼らにとって重要人物を生き返らせるのが目的か)

「……」

衣類は俯き、深刻な表情で地面を見つめる。

「ふう」

それから一息吐くと、顔を上げる。

(まあ、そんな事は私にとってはどうでも良い事。今やるべき事は)

衣類は自分を睨む擬音と怯えている李衣を一瞥した後、

(擬音と李衣を護る事だ)

決意したように前を見据えた。

突如現れた黒ローブに警戒したように寛呂は、魔法石を握り締め、賢呂は緊張したように身を固める。

「あらあら、そんなに固くならなくても良いのよ？」

黒ローブは被っていたフード取った。現れたのは綺麗な金髪を垂らした整った容貌の女性。

「あんたが、放火犯か？」

女の宥めを無視して、警戒したまま、寛呂が尋ねる。

「そっだと言ったら？」

女は挑発するように妖艶な笑みを浮かべる。

「……っ」

ギリツと歯ぎしりする寛呂。賢呂も兄の陰に隠れつつも、女を睨

む。

「……何でこんな事をするんだ」

寛呂は沸き起こる怒りを抑え、女を睨み付けながらそう尋ねた。

「ふふっ、そんな事、知らなくても良い事よ。どうせ、貴方達は」

女はローブのポケットに手を入れながら、

「死ぬんだから！ 《ヘル・ウイン・ブレス》」

煌めく青い光沢。

ポケットから素早く出した拳から、風の刃が寛呂達目掛けて飛び掛かる。

「くっ！ 《リオ・グラン・シルド》」

土の盾が寛呂と賢呂を護る。しかし、強力な風の刃の前に土の盾はボロボロと削れていく。

「くすくす、リオ程度で防げるとでも思ってるの？ 《ヘル・ウイ

ン・ピラス》」

女は楽しそうに呪文を詠唱。

拳から風の槍が賢呂目掛けて襲い掛かる。

先程、展開していた土の盾は脆くも風の槍は貫き、賢呂の心臓を捉える。

「賢呂おおお！」

寛呂は弟の危機に走る。

そして、風の槍が賢呂を貫く刹那。

「うぎゃああああ！」

悲鳴を上げたのは寛呂だった。

「兄さんっ！」

寛呂に突き飛ばされ、地面に倒れていた賢呂は直ぐ様立ち上がり、地面をのたうちまわる兄の下へ駆け寄る。

寛呂は右腕の二の腕を抑えていた。それより先は、一切無く、肘からバツサリ切られていた。

「兄さんっ！ 兄さんっ！」

溢れ出てくる鮮血。苦痛に寛呂は悲鳴をあげる。

「痛い！ 痛い！ 痛えよお！」
弟の言葉など耳に入っていない。

「あ、あ、ああ！」

賢呂は血に染まった自分の両手を震えながら見つめ、眼を見開く。
「あははははは！ もう、最高お〜。良い声で鳴いてくれるじゃない。ゾクゾクするわ」

女は狂ったように嬉しそうに笑う。

「じゃあ、次は貴方ね。貴方はどんな声で鳴いてくれるのかしら？ あっはははははは！」

賢呂は腰を抜かしたように尻餅をつき、顔は恐怖で怯えていた。

女は青い光沢を放つ宝石を握り締め、徐々に距離を縮めてくる。

そして、賢呂の目の前まで来ると、

「バイバイ、坊や」

女は満面の笑みを浮かべる。口元は口が裂けたみたいに横に広がっていた。

「ひいひい……」

賢呂は固く眼を瞑る。

「何をしている」

その時、そんな声が聞こえた。

「……」

女は振り返る。賢呂もゆっくりと眼を開いた。

そこには容姿の整った少年が立っていた。

「せ……刹那兄さん！」

賢呂は希望を見つけたみたいに眼を輝かせた。

そう、容姿の整った少年は古・刹那であった。

「せ、……っな」

痛みでうずくまっていた寛呂も刹那を認め、うつすら笑みを浮かべる。

「……」

刹那は無表情で賢呂達の下へ近づく。そして、血塗れの寛呂を一

瞥して、

「こいつらには手を出すなと言っただろう」
女を睨む。

「ごめ〜ん。そんな怒らないですよ。だって、こいつらが逃げようとしてたからさ、しょうがないじゃない。せつちゃん」

女は気にした様子も無く、甘ったるい声を出す。

「せ…………刹那兄さん？」

賢呂はギコチナク刹那の名を呼ぶ。その表情からその女とは知り合いなのかと尋ねたいのがありありと判る。

「…………」

そんな賢呂の呼び掛けにも応じず、刹那は女を無表情に見つめたまま。

「せ…………つ…………な？」

寛呂も絞り出すような声で刹那を呼び掛けるが、反応は一切無い。「ぷつ…………はははははは！ もう、ダメえ。堪えられない！ せつちゃん、マジ最高おー。さっきから、このふたり、ずっと貴方の事見るのにシカトとか…………ククク…………可哀想よ」

可笑しくて堪らないというように女は腹を抱えて笑う。

「…………どういう、事？」

賢呂はそう震えた声で刹那に尋ねる。寛呂も信じられないというように刹那を見つめる。

「…………」

刹那は視線を賢呂と寛呂に向けるが、沈黙を貫いたまま。

「くすくす、教えてあげようか？」

女はイヤらしい笑みを浮かべながらそう言う。

「貴方達が慕ってるせつちゃんはね。私達のお仲間なの」

「…………は？」

理解出来ないという表情を浮かべる賢呂と寛呂。

「だからね。せつちゃんはこの街を放火した私達とお仲間でせつちゃんも放火犯なの」

分かりやすく諭す口調で女は告げる。

「う、……嘘だ！ そんなの嘘に決まってる！ そうだよね！？
刹那兄さん？」

そう必死に賢呂は刹那に問い掛ける。

しかし、

「……」

刹那は無言。

「そ、そんなあ……」

泣きそうな声で賢呂は呟く。

「け……ん、りょ」

賢呂はそう賢呂を呼び掛ける。泣きそうな顔で振り返る賢呂。

「ろ」

「え？」

何か賢呂が言うが、聞き取れない。

賢呂はもう一度、同じ言葉を告げる。

「逃、げろ」

「な！」

聞き取れた賢呂は眼を見開く。

「俺が……時間を稼ぐから、早く、逃げろ」

「そんなのヤだよ。兄さんを置いていくなんで！」

駄々をこねる賢呂。

「早く、しないと、おまえも……ハアハア」

賢呂は荒い息をする。彼の周りにはもう血の湖になっていた。

「兄さんっ！ 兄さんっ！」

泣き叫ぶように賢呂を呼ぶ。冷たくなった身体を支え、賢呂は兄の死の恐怖に怯える。

「兄弟愛って素晴らしいわね。そんなに仲が良いなら一緒に殺してあげるわよ」

女はうっとりした表情で宝石を構える。

「やめろ」

鋭い刹那の音が響く。女は一瞬ビクツとなる。

「な、何よ。判ってるわよ。手を出さない約束でしょ？ もう、せ
つちゃんって冗談が通じないからつまんない。私、街の方行くから」
ふて腐れたようにそう言うと、

「《バルトニス・ウイン・ムーヴ》」

女は呪文を唱え、姿を消した。

「……」

それから、刹那は無表情に賢呂達を見つめる。

賢呂は寛呂の身体を支えながらも、刹那を睨む。

「な、んで……刹那」

寛呂は泣きそうな眼で刹那を見つめる。

「……」

しかし、刹那は何も答えない。

そして、刹那はポケットから宝石を取り出す。

「……っ！」

賢呂は自分の兄を護るように、刹那の前に立ちはだかる。

「けん……りよ、やめろ」

寛呂はそう言うが、それでも賢呂は自分の兄を護る為に、両手を
広げ、庇う。

刹那はそんな賢呂にも構わず、呪文を唱える。

「《リオ・ウイン・ブレス》」

風の刃が賢呂目掛けて襲い掛かる。

「ぐほっ……！」

凄い勢いで賢呂は後ろに吹き飛ばす。倒れていた寛呂を通り過ぎ、
木に激突した。

「うっ……」

賢呂は衝撃で呻く。朦朧とした意識の中、刹那を見る。

刹那はポケットから何かを取り出し、それを構えると、寛呂に向
かって呪文を唱えた。

「……」

次の瞬間、寛呂は黒い円球に包まれる。円球は徐々に小さくなり、
「え？ な、なに？ あれ？ ちよつと！ 待つ」

一瞬して、消えた。
「……え？ うそ」

賢呂は信じられないというように寛呂が居た場所を見つめる。

しかし、跡形もなく寛呂は消えていた。

「……兄さん？」

賢呂は放心状態にそう呟いた。

「……」

そして、しばらくして刹那が近づいてくる。

「兄さんを……どこへやった？」

賢呂は眼に涙を溜めて刹那を睨む。

「……」

刹那はただ無言で賢呂を見つめるだけ。

「兄さんを、どこへやったかって聞いてんだよおお！」

刹那に掴み掛かる賢呂。

「《リオ・ウイン・ブレス》」

賢呂はバンツと吹き飛び、また木に激突する。

「う……う」

頭を抑えながら賢呂は呻いた。

「……寛呂は消えた。いや、消した」

刹那は賢呂を見据え、告げる。

「この俺が」

賢呂は眼を見開く。

「き、消えたってどういう事だよ！」

賢呂はそう呟えた。

「死んだ。いや、存在自体が消えて無くなった」

刹那は無表情でそう淡々と告げる。

「は、はは……はああ！？ ふざけんじゃ」

「《ヘル・プラント・バンド》」

「ぐうっ！」

一瞬して賢呂は木のツルに拘束される。

「なんで！？　なんでだよ！　刹那兄さん！　なんで兄さんを！
どうしてだよ！　兄さんを返してよ！　兄さんを返せよおお！」

賢呂は泣き叫ぶ。

しかし、刹那は無表情のまま。

そして、漸く口を開く。

「……賢呂。俺が憎いか？」

それを聞いた瞬間、賢呂の顔が一気に変わる。

「憎いかってふざけんじゃねえええ！　殺す！　絶対、殺してやる
ううっ！」

必死にツルから逃れようとするがうまくいかない。

「そうか……憎いか。憎いなら、俺を殺せ。俺を見つけ出し。俺を
殺せ。ブロークンベルト共ども」

「そんなに殺して欲しいなら殺してやるうう！　だから、これを外
せええ！　殺す！　殺してやるううっ！」

「今は無理だ。俺は今死ぬわけにはいかないからな」

刹那はそう言うと、宝石を取り出し、

「《リオ・サンダー・プレス》」

呪文を唱える。

青い閃光が賢呂を襲う。

「うがっ……！」

賢呂はその唸り声と共に意識を失った。

衣類一行は薄暗い雑木林の道を進む。

「ん……？」

何を思ったか、古・龍華は立ち止まり、不振そうに辺りを見渡す。
それに合わせる如く、後ろに居た衣類達も足を止める。

「どうかしましたか？」

古・龍華の背後に居た黒ローブの男が尋ねた。

「いや……ふむ、微かにだが、魔力を感じる。多分……搜索魔法辺りか」

古・龍華は静かに黒ローブの問いに答える。

「まさか、奴らでは？」

龍華の言葉に黒ローブは警戒したように辺りを見渡す。

「可能性は充分ありえる。先程奴らの下っばが居たしな。どうせ、警察辺りから、情報を得たのだろう」

古・龍華は眼を細め、前を見据える。

「どうします？ 魔法で移動しますか？」

「いや、それでは我々の位置を報せているようなものだ。遅いが慎重に歩いて行こう」

そう古・龍華が告げると、

「了解しました」

黒ローブの男は深々と頭を下げた。

そして、また一行は歩みだす。

「……」

衣類は古・龍華の後ろ姿を見つめる。

(奴ら……って誰？ さつきからこいつらは何を警戒しているの？

……警察ってわけでもなさそうだし)

衣類は思考を続ける。

(もし、警察でないなら、その奴らってのは……私達の味方？ それとも……)

キュイン

「な、なんだ！？」

唐突に地面が光だす。

そして、地面に巨大な魔方陣が浮かび上がる。

「くっ……畏だ！ 早くこの魔方陣から離れろ！」

古・龍華がそう叫んだ。

「クソッ！」

黒ローブの男は悪態を吐き、魔方陣から出ようと走る。

「畜生！ なんなんだよ！」

「……っ」

中性声の男とグロースは擬音達を置いて、魔方陣から離れようとする。

「李衣！」

衣類はそう叫びながら、李衣の元へ走る。

「チツ……！」

擬音は奪われなかったエメラルド色の宝石を取り出し、李衣に向け、

「《リオ・ウイン・プレス》」

呪文を唱えた。

「おねえちゃ つ！？」

李衣は擬音の放った風の刃に吹き飛ばされる。

「李衣い！ キャッ！」

吹き飛ばされる李衣を受け止めようと衣類は構えるが、勢いに負け、衣類も李衣と共に吹き飛ばされる。

「痛ッ……」

地面に叩きつけられた衣類は頭を擦りながら、李衣の無事を確かめる。

「大丈夫！？ 李衣！」

「う、うん、だいじょうぶだよ、おねえちゃん」

李衣の無事に安堵の溜息をついて、気付いたように魔方陣に眼を向ける。

「擬音！」

衣類はそう叫び、魔方陣に向かって走り出す。

「……」

擬音は衣類の方を向く。もう、魔方陣から逃れようと思わないの

か、ただ、立ち尽くすだけである。

「擬音、早く、逃げてええ！」

衣類はそう走りながら叫ぶ。

「……」

擬音は衣類を見つめ、何かを告げる。

が。

遠すぎて何を言っているのか判らない。

擬音は衣類に向かって何かを投げる。

衣類に届かず、地面に転がったのはエメラルドに輝く石。宝石だ。

衣類はそれを素早く拾い上げ、擬音に向かって懸命に叫ぶ。

「擬音！ 早くそこから離れて！」

しかし、擬音は一步も動こうとしない。

必死の衣類の努力も無駄に畏の魔方陣は完成し、魔法が発動した。

ようやく理解できた。

擬音は魔方陣の上でそう思った。

何故、彼女は奴らの仲間になると言い出したのか。

それがようやく理解できた。

（いつも、そうだ）

自分はいつも後になって気付くんだ。

彼女には本当に酷い事を言った。彼女は悪くないのに、凄く睨んだ。

自分はなんて愚かで馬鹿なんだろうか。

彼女は自分達を護ろうとして、仕方なく彼らの仲間になったのに。

例え、自分の命を犠牲にしても、自分や李衣を護ろうとしてくれたのに。

（それなのに……俺は）

そんな事も理解できずに酷い事を言った。

「！ ！」

彼女は必死な形相でこちらに走ってくる。

こんなにも自分を心配してくれる人が自分達を見捨てるだろうか。
いや、否だ

擬音は泣きたくなる。でも、それを必死耐える。

自分は今もう逃げる事は出来ない。どんなに走った所でこの魔方陣から出る前に魔法が発動するのは間違いない。

だから、

「衣類！ こいつを使って李衣を連れて逃げろ！」

擬音は持っていた宝石を投げる。

拘束魔法の所為で思うように投げられず、宝石は僅かに届かず、衣類の足元に転がる。

「、、！」

衣類が何か言う。しかし、遠すぎて、聞き取れない。その分だと自分が言った言葉も彼女に届いてないだろう。

辺りが一瞬にして薄暗くなる。どうやら、魔法が発動したらしい。

(もう……完璧、逃げられないな)

だけど、言わなければならぬ。

彼女に、言わなければならぬ事がある。

自分が死ぬ前に。

言わないと。

「擬音、早く、逃げてえええ！」

擬音は一瞬にして、黒い円球に包まれる。

「……」

擬音はまた何か衣類に向かって告げる。やはり、遠すぎて聞こえない。

「……っ」

しかし、今回は口元で読み取る事が出来た。

「ご、め、ん、な、さ、い」

黒い円球は徐々に小さくなり、最終的には擬音と同じ大きさになった瞬間

「……………」

言葉を言い終えた擬音は微笑む。

消えた。

跡形も無く。

「……………」

放心したように立ち尽くす衣類。

「……………なんで」

衣類は呟く。

「なんで、逃げないのよ」

力尽きたように膝が折れ、膝が地面につく。

そして、頭を抱えると、

「いやあああああああああ！」

叫び声を上げた。

「小癪な真似を」

古・龍華は衣類の隣に立ち、そう憎々しげにそう呟く。

「……………」

衣類は放心状態で擬音の居た所を見つめていた。

ガサガサ……………」

そんな草の擦れる音が聞こえた。

「……チツ」

古・龍華は舌打ちする。

彼の敵対する相手が現れたのだらう。それはもしかしたら、衣類達にとって仲間かもしれない。

しかし、衣類は歓喜する事も安堵する事も出来なかった。何故か。そんなの決まっている。自分の仲間が殺されたからだ。

その魔法は見た事も聞いた事も無いような魔法だった。しかし、でも、なんとなく判るのだ。

邪悪の黒の光が擬音を包み込んだ時、それは決して良い魔法では無い事が。

古・龍華が苦々しそうな表情を浮かべているのが良い証拠だ。

じゃあ、擬音は一体どうなったのか？

生きているのか？

「なにを……言っているの……そんなの見た通りじゃない」

皮肉った独り言。

見た通り。

邪悪な黒い魔法は擬音を包み込み……“消えた”のだ。

「糞っ！」

悪態をつき、衣類は両手を握り締める。爪が皮膚を傷付け、僅かに血が滴る。

だからといって、別に彼女の力が増幅する訳でもないし、擬音が生き返る訳でもない。

ただ、自分の身を傷つけるだけだった。

擬音が消えたのは、どうしようもない現実なのだ。

「畜生おおお！」

自分の無力がここまで憎い事は無かった。

今まで、自分は天才だと周りからチャホヤされていたが、実際は違う。

努力を積み重ねて、漸く天才という称号を手に入れたのだ。でも、その天才という称号は肝心な時に役に立たない。

先生も、ギリオンって人も、李衣も、……擬音も、誰も助けられなかった。

何の為の天才の称号なんだ。

結局、自分はただの無力の少女でしかない。役立たずの子供でしかない。

「……やはり、貴様らか」

恨めしそうに呟く古・龍華の視線は音のした方を睨んでいた。

その古・龍華の言葉と共に現れたのは全身白を纏った人。古・龍華達の衣装と正反対の服装である。

「目標確保に失敗しました」

一人の白装束が無機質な声でそう告げる。

「作戦Bに移行します。戦闘配置についてください」

答えるように小柄な白装束がそう命令した。

「はっ！」

小柄な白装束以外の白装束が素早い動きで、衣類達を円を描くように囲う。

「チツ……！」

舌打ちしながら、古・龍華は漆黒の宝石を持つ右手を小柄な白装束に向け、呪文を唱えた。

「《バルトニス・サンダ・ピアス》！」

青い閃光が小柄な白装束を襲う。

しかし、それを阻むように近くに居た白装束が古・龍華の前に立ちはだかった。

「ぐはっ！」

閃光が白装束の胸に直撃。白装束は黒焦げになり、地面に倒れた。

「なっ……！」

古・龍華は驚愕したように眼を見開く。まさか、部下が盾になるとは思わなかったのだ。

動揺したその隙を白装束達が見逃すはずもなく、古・龍華に向け、呪文を唱える。

彼の足元に先程の魔法陣が浮かび上がった。

「しまった！」

古・龍華は逃れようとするが、

「《リオ・ウイン・ブレス》」

「ぐっ……！」

周りを囲む白装束の魔法により、魔法陣に押し戻される。

「龍華様！ 《バルトニス・ウイン・ムーヴ》」

黒ローブは自身に移動呪文を唱え、古・龍華の元へと駆ける。

しかし、それを防ぐように白装束達は黒ローブに拳を向けて、呪文を唱えた。

「《ヘル・フレア・ブレス》」

黒装束に炎の刃が襲いかかる。普通の人間ならば、足を止め、自分の身を守る為、防御呪文を唱えるだろう。

「こんなものおおお！」

しかし、黒ローブはその炎の刃に突っ込んだ。

黒ローブに火が移る。だが、そんな事関係無く、黒ローブは走る。主を助ける為に。

古・龍華の元に辿りついたその頃には、彼の纏っていた黒ローブはすべて燃えカスとなり、全身に大火傷を負っていた。

「悌二……お前」

古・龍華は少しうろたえたように部下を見る。

「世界を……変えるのは……あなたです。どうか……どうか、世界を……人類を……お救いください」

悌二と呼ばれた男は懇願するような眼差しで古・龍華を見つめた。

「……ああ、変えてやる。その為に私は居るのだから」

少し間を置き、古・龍華は不敵な笑みを浮かべそう告げる。

「はい」

主の答えに悌二は嬉しそうに微笑んだ。瞬間、地面の魔法陣が

光り出す。魔法が発動する前兆だ。

「くっ！」

古・龍華は苦虫を噛み締めたような表情をする。

「龍華様、早く……私にお掴まり……ください！」

「あ、……ああ」

悌二の言葉に従い、古・龍華は彼の肩に両手で掴まった。

「《バルトニス・ウイン・ムーヴ》！」

その呪文と共に悌二は魔法陣の外へと高速で走り出す。

「させません。《バストニス・アイス・プレス》」

彼らの動向を察知した小柄な白装束が悌二を足止めしようと魔法を唱える。

悌二達に襲いかかる無数の氷の刃。

「そんなものでええええ！」

しかし、悌二はそれを器用に避けながら、魔法陣の外を目指す。

「そんな……」

小柄な白装束はうるたえた声を漏らす。

悌二達が魔法陣から逃れると同時に魔法が発動する。

「ふ……危うい所だったか」

黒い球体を眺めながら、古・龍華は冷や汗を掻いた。それから、自分を助けた部下に振り返る。

「悌二、流石は私が認め……」

古・龍華は絶句する。

「……ご、無事ですか？ ……龍華さ、ま？」

今にも壊れそうな微笑みを浮かべる悌二の胸に氷の刃が突き刺さっていた。突き刺さった部分からドクドクと鮮血があふれ出ている。

「……悌二、お前」

「は、はは……しくじりました。もう、私は……ダメですね」

自嘲気味に笑う悌二はとても痛々しい。

「ダメなんかではない！ あの少女が居る。あのゴールデンバードとか言う奴の傷も治したのだ。お前のだって」

ブシヤリという嫌な音がする。

生温かい液体が古・龍華の顔にかかった。

「全く、世話が焼けます。こんな手荒な真似はしたくなかったのですが、仕方ありませんか」

その声は小柄な白装束のものだった。

古・龍華の正面少し離れた所で、拳を突き出している。

「……」

古・龍華は自身の顔にかかった生温かい液体が何であるかを確認するように頬を触った。

そして、その液体を噴き出した者を見つめる。

地面には鮮血の湖が出来ており、それを作った張本人の首は一刀両断されており、また、胴体も真横に引き裂かれ、内臓がはみ出ていた。

「貴様あああああ！」

古・龍華は怒りを露わにして、拳を突き出す。

「嘆く暇はありませんよ。古・龍華」

小柄な白装束も拳を突き出し、呪文を唱える。

「《バルトニス・アクア・ピアス》！」

「《バルトニス・フレア・ピアス》」

水の槍と炎の槍がぶつかり合う。

その瞬間、辺り一面に霧が舞い起こった。

「……水蒸気」

小柄な白装束は手で熱い水蒸気から顔を庇う。

「貴様は必ず私が殺す」

霧の中、古・龍華の殺気に満ちた声が聞こえた。

「……逃げたか」

小柄な白装束はそう呟き、諦めたように溜息をつく。

「《ヘル・ウイン・トルネード》」

どこからかそんな声が聞こえ、一瞬にして霧が晴れた。

「奴らは……!?!」

魔法を使ったであろう白装束が駆け寄り、尋ねる。
「逃げましたよ。うまい具合にね」
小柄な白装束はそう答えると、空を見上げた。

「……………一旦、退避する」

古・龍華達は白装束達から少し離れた木陰で身体を休めていた。
衣類と李衣も彼らの近くに居る。

「しかし、悌二様が！」

中性的な声の黒ローブは不満があるように、龍華を見つめた。

「黙れ！」

「ひっ……………」

古・龍華の威勢に中性的な声の黒ローブはビクツとなる。

「悌二の犠牲を無駄には出来ない。我々にはやることがあるのだから」

古・龍華は苦々しげ呟くと、漆黒の宝石を握りしめる。

「……………」

そんな古・龍華を見て中性的な声の黒ローブは押し黙った。

「……………」

衣類はそんな彼らを見つめて、思う。

（こんな奴らでも仲間が死ぬとつらいと思うのか……………人が死ぬと悲しくなるのか。なら、なんで、なんで）

衣類の顔は歪み始める。

（なんで、擬音を……………）

「お、おねえちゃん？」

李衣が泣きそうな表情でこっちを見ていた。

「こわいかおしてる……………」

「……………」

怯えている李衣に衣類は我に返る。

「ごめん、ごめんね」

衣類は李衣を抱きしめながら、そう謝った。

(そうだ、まだ、李衣が居る。まだ李衣が生きてる。この娘だけでも助けなければ)

衣類は眼をギュッと瞑り、下唇を噛み締める。

「うっ……」

賢呂が目を覚ます。

朦朧とした意識の中、徐々に視界がはっきりする。

そして、自分が地面に倒れている事に気付く。

「いつ……」

身体に痛みを感じ、賢呂は身体を丸める。

ツルに締めつけられていた所為か、体中が痛い。

不意に視界にツルの切れ端が目に入り込んだ。

「なんで……」

賢呂は散乱したツルの破片を睨みつけながら、告げる。

「なんで、解いたんだ……あいつは」

目じりから涙が零れた。

「なんで、なんでだよ……」

顔を地面に押しつけながら、

「許さない……絶対、許すものか……だって……兄さんを、兄さんを！」

片手を地面につき、賢呂はゆっくり起き上がる。

ふらふらしながら、なんとか立ち上がり、街の方を見つめた。

「え……?」

街の方面から白い煙が所々から出ていた。

「母さん、父さん……うっ！」

走ろうとしたが、身体全体に激痛が走り、うづくまってしまふ。

「こんな所で……」

それでも、なんとか体勢を立て直し、歩を進めた。

「馬鹿が！ 何故、ちゃんと見ていなかった！」

古・龍華は中性的な声の黒ローブに向かって怒鳴った。

「も、申し訳ありません！ まさか、更に宝石を持っているとは……
…思いもしなくて」

中性的な声の黒ローブは動揺したように視線を下に向ける。

「そんな言い訳など聞きたくなどない！ とにかく、あの少女を捕えろ！ なんとしてもだ！」

「は、はい！」

「はっ！」

古・龍華の命令に黒ローブとグロースが答えた。

衣類と李衣は林の中を全力疾走で駆けていた。

木の枝や草の葉が彼女らの肌を傷付けるが、それでも、構わず彼女達は走る。

「李衣、もつと早く！」

「……はあ……はあ……ごめ、……はあ」

衣類は自分と李衣の歩幅の違いを理解していながらも、李衣を焦らせた。

そうしないと捕まると判っているからだ。

李衣も姉の言う通り、必死に走る。息切れしながら、何度もこけそうになりながらも。

(李衣……ごめん。でも、逃げないと……走らないと！)

そう心の中で何度も謝りながら、衣類は前に向かう。

「ここなら、大丈夫か」

衣類は古・龍華達からかなり離れた場所で足を止めた。

「……はあ……はあ……」

李衣は膝を地面に付き、息を整えている。

「ごめんね……李衣」

衣類はしゃがむと、李衣の髪を撫でた。

「うっん、だいじょうぶだから」

李衣は疲れ切った表情を無理矢理笑顔に変えてみせる。そんな健気な妹を見て、

「李衣！」

衣類は李衣をギュッと抱きしめる。

「お姉ちゃん。李衣を絶対守るから。お姉ちゃん、絶対守るからあ
！」

「い、いたいよ。おねえちゃん」

「ごめん、ごめんね」

衣類は謝りながらも、更に強く李衣を抱きしめる。

「……李衣」

暫く抱きしめた後、衣類は李衣を離し、真剣な表情で告げる。

「今から、あなたに魔法をかける」

「え？ まほう？」

李衣は怪訝そうな表情をする。

「うん、そう、魔法。本当に守りたい人に使う、魔法」

「んん？」

よくわかってない李衣は頭にクエスチャンマークを浮かべたまま、姉を見つめる。

「くす」

そんな李衣に思わず、衣類は笑う。それから、優しい表情と悲しい表情が混じり合ったような顔をして、

「ごめんね……李衣。あなたを守るにはこれしか方法がないの。ごめんね……」

衣類はそう李衣に謝罪した。

「おねえちゃん、リーにあやまりすぎ。リーはだいじょうぶだよ？

リーつよいこだもん」

李衣は姉に元気になってもらいたくて、そうちからコブを見せて、

自分が強い事をアピールする。

「李衣……ありがとう」

李衣の気遣いに衣類は優しく頬笑む。

「じゃあ、李衣、魔法をかけるよ」

そして、衣類は真剣な表情になり、握り締めたエメラルドの宝石を李衣に向ける。

「うん」

李衣は待ち構えるように眼を固く閉じた。

「《シン・シャイン・エンジェル》！」

衣類の詠唱と共に宝石が光を発する。

そして、次の瞬間、衣類を包み込むように天使が現れた。

「……出来た、初めて、成功した」

衣類は自分の背後に召喚された天使を見て、驚愕する。

「わー……てんしさんだあー」

李衣も驚きつつ、嬉しそうに正面の天使を眺めた。

「天使に命ずる。私の妹を守って！」

衣類はそう天使に向かって叫ぶ。

『わかりました。その際に、私を召喚継続の為、対象者の魔力を常に頂く事になりますが、それでもよろしいでしょうか？』

天使がそう問うと、

「ええ、それで李衣が守られるのなら」

衣類はそう真剣な表情で頷いた。

『契約に基づき、私、天使ルールは、琉・李衣の護衛の命を承ります。よろしく願いますね。ご主人様』

天使は李衣に頭を下げる。

「う？ むー……よろしくね！」

何を言っているのか理解できない李衣はとにかく自分に挨拶している天使に挨拶をり返した。

「くすくす」

そんな微笑ましい光景に衣類は思わず微笑んでしまう。

が、そんな楽しい時間も急速に終わりを告げた。

「っ!？」

衣類は何か不穏なモノを感じ、振り返る。

「ん? ……おねえちゃん?」

急に雰囲気が変わった姉に不思議に思い怪訝そうに尋ねた。

「……………」

衣類は振り返った方向を眼を細め、睨みつける。

「李衣、隠れるよ」

素早い動作で衣類は李衣を木陰に押し込み、自分も身を隠す。

「ど、どうしたの?」

「黙って」

李衣の問いに衣類は手で李衣の口を塞ぐ。

そして、草々の間から、衣類は何かを睨みつける。

「微かにだが、ここ周辺で魔力を感じた」

衣類達が元居た場所に現れたのは、白装束の集団。

「むぐっ」

李衣が驚きの声を上げそうになったので、衣類は更に強く手で李

衣の口を押さえる。

(魔力を感知している? やっぱりさっきの魔法を感知したのか。

なら、このままだと、李衣に危険が……例え天使が付いているとし

ても、奴らにどれだけ対抗できるかどうか……)

衣類は李衣を心配そうに見つめた後、もう片方に握られているエメ

ラルドの宝石をジッと見つめ、

(なら、手段はこれ以外に無い)

衣類は決意したように、グッと宝石を握りしめた。

「李衣、あなたはここで大人しくしてるのよ?」

「え? な、なに?」

李衣は恐怖で衣類の声が聞こえなかったのか、聞き返した。

「李衣……大丈夫だよ。あなたは私が守るから」

衣類はそんな怯える妹の頭をそっと撫でる。

「李衣、ここを動いちゃダメよ？ 何があっても」

「え？ う、うん」

李衣はイマイチ了承できないといった感じに頷く。

「李衣は良い子だね。李衣、お姉ちゃん、李衣のこと大好きだからね？」

「え？ え？ おねえちゃん？」

雰囲気で察したのだろう。李衣は急に不安になる。まるで、二度と姉が戻ってこないような錯覚に襲われる。

「ルール……李衣をお願いね」

衣類は李衣の背後の居る天使に真剣な眼差しを向ける。

『はい。ご主人様のことは必ずお守りします』

天使の答えに衣類は微笑むと、決意したように走り出す。

「おね むぐ！」

李衣が走り出した姉に追いかけてよとすることを、天使が巨大な羽使って阻止する。

「居たぞー！ あそこだ！」

白装束の一人が叫んだ。

衣類はそれでも走る。なるべく、李衣から離れる為に。李衣の安全を確保する為に。

「《バルトニス・ウイン・ムーヴ》！」

衣類は移動魔法を詠唱する。

しかし、敵も移動魔法を使用し、距離は広がらない。

寧ろ、徐々に追い詰められていく。

(やつぱり、あれだけ、魔法を使えば、限界も来るか……)

それでも衣類は諦めず、逃走する。

妹を守る。それが彼女を突き動かしていた。

「琉・衣類様。もう観念してください」

衣類に追い付き、隣に並んだ白装束がそう告げる。

「あら？ あなたも私を知ってるの？ ふふ、今日は私を知っている人によく会う日だね。有名人なのかしら」

ただの強がりだった。魔法の使いすぎで精神の限界を通り過ぎた衣類は意識を何度も何度も失いそうになりながらも、逃亡を続ける。「冗談はやめて、お止まりください！ そのままではあなたの命が！」

白装束がそう焦ったように言う。

「私を……殺しに来て置いて……よくも……まあ」

（もう……力が……）

力尽きた衣類はスピードが落ち、最終的には地面に転げ落ちた。

「琉・衣類様！」

白装束は衣類に駆け寄る。

そして、虫の息の衣類を抱きかかえた。

「その娘をそこに置きなさい」

後から追いついてきた小柄な白装束が、衣類を抱える白装束に命令する。

「し、しかし」

白装束は小柄な白装束に反論しようとするが、

「置きなさいと言っているのが判らないのですか？」

その小柄な白装束の威圧した声にしぶしぶ従う。

「この娘はここには残してはいけない存在です。我らの新天地に送ります。神よ。《シャイン》を受け継ぐ彼女を受け入れたまえ！」

そして、白装束が何か呪文のようなモノを唱えた瞬間、衣類は黒い光の球体に包まれる。

徐々にそれは小さくなり、それは消滅した。

「くっ……」

それを見た白装束は下唇を噛み締める。

「案ずる事はありませんよ。琉・衣類様は無事に我らの新天地に送られました。多少の身体の負担がありますが、きつと、向こうの彼らが彼女を助けてくださいます。あなたは優しい子ですね、テイル」

小柄な白装束はそうテイルと呼ばれた白装束に頬笑み、ゆっくりと深くかぶっていたフードを外す。

そこには白髪の少女の顔があった。それはとても儂げで、美しいとも可愛いともいえる美貌。

少女は空を見上げ、神に祈りを捧げるように両手を組んだ。

「父さん……母さん……」

賢呂はふらふらした足取りで、林の向こうにある自分の街を目指す。

意識が朦朧として視界が揺らぐ。

足が重く感じ、思ったように前に進まない。

「糞……頑張れよ、ぼく」

賢呂は自分を激励するように足を叩く。

「あと、もうちょっとなんだ。後少して……」

そして、何度も何度もよろけながら、こけそうになりながら、目的地に辿りついた。

「え……?」

賢呂の眼が見開く。それはまるで信じがたいものを見てしまったかのように。

「うそ……だろ?」

賢呂の眼に映るその光景は、あまりにも悲惨な光景だった。

街は全焼し、街の入り口である門には、数人が血を流し倒れている。その大量の血から見る限り、もう彼らは死んでいるの明白だった。

「け、警察……?」

彼らが纏う服装はあまり街では見かけないものである。しかし、賢呂はそれをよく知っていた。いや、一般人なら誰でも知っている服装だ。

「……と、父さん、母さん!」

唐突に焦りを感じた賢呂は痛みをこらえながら、無理矢理走り出した。しかし、それは走っているとも言えない速度で、まだ早歩き

で歩いた方が早いぐらいの速度。それでも、賢呂は自分の両親の無事を確かめる為、足を動かす。

街の路地を進むたびに凄い異臭が賢呂を襲う。鼻が曲がりそうになるような異臭だ。

「おえっ……」

賢呂は吐きそうなのを堪え、街の情景を伺う。住宅だったはずのそれらは、異常な崩れ方をしているのもあれば、半壊しているの建物もある。ただ、確かに言えるのは、その家々には既に人が無い事だけだ。

「……」

人が無いというのは、人が居ないという意味では無く、まるで人が居ないくらいに静けさが漂っているという意味だ。街が静寂を制している。それが更に賢呂を不安させ、焦らした。

「早く、後少しだから……後少しだから……」

どれぐらいの時間をかけて、賢呂は走ったかは判らない。しかし、賢呂にとって、それはとても長い時間に感じられた。そして、ようやく、自分の家の近くにまで辿りつく。

そこに辿りつく頃には全身が汗びっしょりで、真夏の密室みたいにむんとする。建物の余熱が残っている所為もあるだろうが、彼がここまで全力で走ってきた所為でもあった。

「あつい……」

賢呂は滴る汗を手で拭う。それから、また足を動かす。あの角を曲がれば、自宅だ。確かに他の住宅は全焼している人が生きている可能性はともじやないがあまり望めないだろう。しかし、建物がある限り、生きている可能性がある。もしかしたら、全焼する直前で外に逃げ出した可能性だって考えられる。

「待っててね。今、行くから」

後、少しだ。あの角を曲がれば、辿りつける。

賢呂は必死に限界に近い足を動かす。何度もよろけながらも、足を前に踏み出す。

そして、漸く、曲がり角を曲がった

「……………」
賢呂は絶句した。

「そんなの……………ないよ」

賢呂の声は震えていた。苦笑にも聞こえるその声には悲しみと怯えが混じっており、

「なんで……………そんな」

見開いた瞳は異常なまでに揺り動いている。

その瞳に映るその光景は、

「父さん……………母さん……………みんな」

人が皆一つの氷に串刺しにされ、地面から突き出ている氷の周りには血の湖が出来ていた。その串刺しされている人の中に賢呂の両親が居た。母は眼を見開き、口を大きく開き、子供に一度も見せた事無い、いや、見せてはいけない表情をしている。父は抵抗したのか、両腕がもぎ取られ、全身火傷を負ったように伺える。どうして賢呂が彼を父親と判別できたかは、彼の父がいつもしている鉄の首飾りがあった為だ。皮肉にもその首飾りは寛呂と賢呂が父の誕生日に送ったものだった。

「うああああああああああああああ！」

賢呂はうずくまり、頭を抱え、悲痛の声を上げた。

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だあ！！！！！」

賢呂は必死に叫ぶ。まるで、その叫ぶことによって、この現実から逃れようとするかのように。

しかし、現実是不変わる。

顔を上げるとそこには串刺しにされた人々。父。母。近所のおじさん。おばさん。お兄さん。お姉さん。年代の友達。子供。

「やだ……………こんな……………やだ……………」

今更になって涙が零れる。ぼたぼたと地面を濡らす。だからといって、何かが変わるわけでもない。

「うああああああああああああああああああああああああああ！」

「！」

そう叫び声をあげると共に賢呂は気を失った。

バランスを失った身体は地面叩きつけられるようにして、倒れた。

(後書き)

最後まで読んでくださってありがとうございます。

読んだ通り、本作まだ完結はしていませんが、短編でお送りしております。

続編はその時の気分で……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9616g/>

フェニックス

2010年10月8日15時19分発行